Digitized by the Internet Archive
in 2018 with funding from
University of Toronto

https://archive.org/details/ranpokappjjutsuk008800

柔術教科書序

十八般の武藝は皆物具を要す獨り柔術に至ては一具の用なく赤手以て不慮の難に備ふるに足る要するに武術は一身の護りたりと雖も之を大にしては一國の護りたり輓近武士道衰頽し又昔日の如くならず奢侈遊惰の潮流滔々として濫亂し殆んど底止する處を知らず豈長大息の至ならずや井口氏玆に憾あり以て此書を編す世の靑年子

5423

弟業務の餘暇之を試み朝に習ひ夕に復し勤むるの精に至らば斯道の妙處を會得せんこと一點の疑を容れず請ふ許多の靑年輩此書に依て柔道の正路を蹈み其身體を健全にし局面一轉尙武の氣風を旺盛ならしめんことを玆に一言を記して以て序と爲す

大正元年十月上旬

北雷狂夫識

自序

柳枝の風に靡くも折るゝこと無きは柔能く剛を制するの理にして柔の奥儀も亦茲に基く故に柔道を學ぶ者は須らく虛心平氣以て自然の理に從ひ日新の工風を最も肝要とすべし予曩に吉田千春久富鐵太郎齋藤明信等の先生と謀りし事の柔術劍道に關する書數部を編し靑年輩の獨學に便す頃日又諸彥より亂捕法の書の著あらんことを望まるゝや切なり然れども予歲旣に耳順に達し燈下書を編するに

懶し辭するに若かずと已にして思へらく余命幾許も無しと雖ども豈碌々として死を俟たん宜しく已れの知得せるものを他人に示さば鈍刀亦一割の功なからんやと茲に於て講道館及諸先生と謀り其術は新を撰み實を取り其說明は煩を避け簡を旨とし俗談平話一に會得し易からんことを要とし以て此書を編す請ふ看官坊間に流布せる似而非的武術書と一樣の觀を爲すなからんことを

次序

今回予が著す處の柔術教科書は本年議會に專習科に加へられたるを以て今之に順序を立て初心の輩に示し更に亂捕の形を斯道熱心者の爲に手を以て敎ふる如く圖畫を加へて說明し又呼吸術より殺活方をも圖解にし中學校以上の學生其他の青年輩の爲め實地經驗の上にて梓に上し以て參考書とすされば各流派はあれども皆大同小異なるを以て柔道の概略は此書によりて會得すべし尚又玆に洩れたるものは他日敎師用の書として之を著し又諸流の形の書とも併せて發行せんと欲す本篇既に云ふ如く斯道の名人上手は漸々に故人となり古來の武術は殆んど有名無實に流れ各流祖の功勞も將に消滅に歸せんとするは實に遺憾のことゝいふべし又古へより一子相傳の極意と稱し秘して人に傳へず徒らに舊習を墨守せる者も亦なきにしも非らず是等は啻に時世に背くのみならず國家に忠ならざるもの也今や舊習一洗十八般の

武藝の奥秘を明々白々説明し滿天下の青年輩をして武術の何たるを解さしめ其體力を壯健にし皇國特有の日本魂を益々發揮し一等國の名に背かざらんことを期し併せて各流祖の功勞に報はずんばあらず頃日德島縣川口郡柿原村松下某より關口流の秘訣古書を寄送されたるを本とし各流秘術の寄書を合し不日世間に紹介の勞を取らんと欲す

大正元年十月

免許 義 爲 識

亂捕活法 柔術教科書目次

柔術の起源……一
柔術大意……二
柔能く剛を制するの理由……三
柔術の形を學ぶを必要とする事……四
武藝進歩に付三妻の心得……六
術を學ぶの心得……八
氣の滿つる事……九
氣と體との事……一一
弱身强壯に成るは柔術にあり……一二
武術に免許皆傳と云ふ事……一三
一心と云ふ事……一四
無我無心の位の事……一五
不動心の位の事……一六
膽力を練磨する事……一七
沈着を守る事……一八
眼の配りの事……一九
掛聲を大切とする事……二〇
殘心放心と云ふ事……二〇
他流試合の心得の事……二一
稽古に相手を忌み嫌ふ事……二三
强情は武藝の大惡と云ふ事……二四
稽古前後の心得……二四
精神と態度の事……二五
同解……二六
陰陽强弱之說及一身の心を論ずる事……三〇
心の割出五系の圖解の事……三一
道場及勝負見所の事……三三
體育より柔術に進むの心得……三四
舊式稽古衣の圖解……三六
新式稽古衣圖解……三六

體育體操法第一圖解……四〇
同第二圖解……四一
同第三圖解……四三
柔術打込の圖解……四四
柔術片手受の圖解……四五
同兩手受留の圖解……四七
柔術霞打込の圖解……四八
柔術突掛の圖解……五〇
同向へ返り第一圖解……五二
同第二圖解……五二
同第三圖解……五九
柔術逆立の稽古第一圖解……五九
同第二圖解……六〇
同第三圖解……六二
柔術車返り第一圖解……六三
同第二圖解……六五
同第三圖解……六七
柔術飛上り稽古圖解……六八
同第二圖解……六九
柔術眞之位第一圖解……七一
同第二圖解……七二
同第三圖解……七四
同第四圖解……七五
同第五圖解……七六
右襟の取り樣の圖解……七八
同逆の圖解……七八
左襟の取り樣の圖解……七八
同逆の圖解……七九
帶捉み處の圖解……七九
同逆捉みの圖解……八〇
喉締の圖解……八〇
亂捕禮式立合の圖解……八〇

雙方立ち上り圖解……八四
襟取り居る圖……八四
柔術足拂の圖解……八五
柔術釣鐘足拂圖解……八七
同第二圖……八九
柔術外掛足拂圖解……九〇
柔術引込足拂圖解……九一
柔術押附足拂の圖解……九三
柔術內踝拂圖解……九五
柔術大內股投圖解……九六
柔術內股投圖解……九八
柔術外股投圖解……一〇〇
柔術膝挫圖解……一〇一
柔術拂足圖解……一〇三
柔術右跳腰の圖解……一〇四
同左跳腰の圖解……一〇六
柔術行連の投第一圖解……一〇七
同第二圖解……一一〇
柔術引込業圖解……一一一
柔術首投の圖解……一一三
柔術蹴落し圖解……一一五
柔術透き落し圖解……一一七
柔術裏股拂圖解……一一九
柔術横車圖解……一二〇
柔術矢倉落第一圖解……一二二
同第二圖解……一二三
柔術背負投第一圖解……一二五
同第二圖解……一二八
同第三圖解……一二八
同第四圖解……一二九
柔術衣被投圖解……一三二
柔術眞捨身第一圖解……一三四

柔術眞捨身第二圖解……一三五
同第三圖解……一三七
同第四圖解……一三八
柔術立捨身投圖解……一四〇
柔術横捨身投第一圖解……一四二
同第二圖解……一四四
柔術蟹挾投圖解……一四五
柔術俵返圖解……一四六
柔術背負落第一圖解……一四八
同第二圖解……一五〇
柔術山嵐投第一圖解……一五一
同第二圖解……一五二
柔術手操投第一圖解……一五四
同第二圖解……一五六
柔術腰投第一圖解……一五七
同第二圖解……一五八
柔術右入腰投第一圖解……一五九
同第二圖解……一六〇
柔術左入腰圖解……一六一
柔術大腰投第一圖解……一六三
同第二圖解……一六四
柔術右抱落投第一圖解……一六五
同第二圖解……一六七
柔術左抱き落第一圖解……一六八
同第二圖解……一六九
同第三圖解……一七一
柔術巻落圖解……一七二
柔術巻込投圖解……一七三
柔術後腰圖解……一七五
柔術移腰圖解……一七六
柔術釣腰圖解……一七八
柔術腰固圖解……一七九

柔術肩車第一圖解……一八一
同第二圖解……一八三
柔術隅返し臥業圖解……一八四
同操り隅返圖……一八六
柔術逵摩返圖解……一八七
柔術引込返圖解……一八九
柔術横落圖解……一九〇
柔術横掛崩圖解……一九一
柔術跳越圖解……一九三
柔術固業の解說……一九四
柔術連固投の圖解……一九五
柔術襟四方固圖解……一九七
柔術腰四方固圖解……一九八
柔術横四方固圖解……一九九
柔術袈裝固圖解……二〇一
柔術抱き返し圖解……二〇二
柔術喉頭固圖解……二〇四
柔術締込逆手の圖說明……二〇五
柔術左片胸捕締圖解……二〇六
同右片胸捕締圖解……二〇六
柔術片胸解き圖解……二〇八
柔術突込圖解……二一〇
柔術右腕挫圖解……二一一
同左腕挫圖解……二一三
柔術胸挫圖解……二一五
同第二圖解……二一七
柔術小手緘圖解……二一八
柔術膝固圖解……二一九
柔術胴締圖解……二二一
柔術足緘圖解……二二三
柔術足挫圖解……二二四
柔術締絞業解說……二二六

柔術十字絞圖解……二二六
同雙十字圖解……二二八
柔術緩絞縮圖解……二三〇
柔術右後絡圖解……二三一
同左後絡圖解……二三三
柔術裸體捕圖解……二三四
柔術當身の解說……二三六
同正面の圖……二三八
同後面の圖……二三九
同當身圖解……二四〇
同正面の部圖解說……二四〇
同後面の部圖解說……二四〇
天倒……二四一
烏兎……二四一
人中、カツコン、霞……二四二
雨毛、獨古、秘中……二四三
松風、村雨、膻中、鳫下……二四四
稻妻、水月、明星……二四五
陰嚢、向骨、草靡……二四六
內外踝、早打、活……二四七
電光、後稻妻、下闔……二四八
尺澤、柔術活法の心得……二四九
人工呼吸術第一圖解……二五〇
同其の二圖……二五二
人工呼吸術……二五五
同第二其の二圖……二五八
同呼吸術の秘法……二六〇
誘活法の圖解……二六〇
同第二圖……二六二
同第三圖……二六三
誘又の活法圖解……二六四
襟活法圖解……二六五

陰嚢活法圖解……二六八
同第一圖……二七〇
同第二圖……二七一
同第三圖……二七二
裏活法圖解……二七三
同圖說……二七四
淺山一傳流活法……二七五
同圖說……二七六
末書に加へて……二七七

亂捕活法 柔術教科書目次終

亂捕活法 柔術教科書

免許 柳松齋 井口義爲著

柔術の起源

凡そ柔術は支那に起りて我國に傳りしものなるべし。去れはに明の萬歴年中に刊行せる萬法全書中にも、劍、鉾、槍、棒、弓、柔術等の圖畫を加たる者あり。我朝にては天文年中作州津山波賀村の人竹内中務大輔久盛なる者此術を修練し、小具足捕手と號け、遂に一派を開く、之を竹内流と云ふ。久盛修驗道を以て諸國を遍歴し到處に此術を教授し、子孫にも亦之を傳へり。今猶中國筋にては往々此流の形を見ることあり。其後永祿年間支那より陳元賓と云ふ者來り武州江戸現今の東京麻布の國正寺に寓居し此術を教ふ、事

三浦義辰、福野正勝、磯貝次郎左衞門の三氏其門に入り各々奥儀を極む、殊に三浦、福野の如きは遂に一機軸を出し別に一派を編出して之を世に擴む。是れ我朝に於て中古柔術の祖と傳稱す。其門人漸次增加して各自一派を開き即ち現今に於ては三四十の流派あり。然して其の亂捕に至りては大抵他派と試合を爲すも劍道の面、胴、小手、突と云ふ如く、又書道を學ぶにいろはを以てすると同じく殆んど同一の形を演ず又柔道亂捕にては腰、手、足、締、逆の業を多く用ふるにより後進者に是等の形を圖に示し以て一般の教科書と爲せり。されば苟も此道に志ある者は必ず之を熟讀翫味し、之に就て學び怠らざるときは現時勇名を轟かせる講道館の八段横山作次郎、山下義昭兩氏の如き技量に至らざるの理なしと心得べし。餘は教師用の著書に明記す。

柔術大意

柔術の大意は柔能く剛を制するの理にして武術中一種特別の技術なり故に此理を會得するときは彼劍術の如く木刀、竹刀、面、胴、小手の道具を用ひず赤裸無手只自體四肢の活動に依り如何なる剛强の者に出會するも直に之を取つて押へることを得るの術たり。されば常に此道を研磨して時に臨んで不覺を取らざる樣にすべし。偖て此道を學ぶには男女を問はず十二三歲より二十六歲迄の間を以て最も適當の期なりとす、故に初め此書に依り稽古を爲すこと久しき時は自然と悟り得るなり。

文運日に進み大平の恩澤に浴する今日といへども惡漢等に出遇ふこと無しとも計り難し故に人々は充分此術を會得し身體を健全にし其機に臨み能く敵を制し不意の凶事を防禦するは最も肝要なることゝ知るべし。

柔能く剛を制するの理由

柔術を會得し得る時は如何なる剛敵無法に出遇時も決して怖るるの念を生ぜず心神沈着にして亂れざる故に其敵に打勝つものなり。又一見敵の形狀弱きに見ゆることあるも決して侮り輕んずべからず先づ敵に如何なる技量あるかを知ることを肝要とす、されば常に其業を練磨して其妙味を解する時は假令多勢の惡漢又は强敵に出遇ふも單身能く之を制することを得るものなり。假令ば大船の水上に行くが如く數人の乘客あるも一人舵機を操つる時は其の欲する處に到達し得るが如し。柔道は亦多數の强敵あるも只一人にて之を操つること舟子の舵機を操つると同一の理なりと知るべし。然れども是を施すに於ては其術の巧拙に係るなれば常に怠らず專心其技を研究すべし。

柔道の形を學ぶを必要とする事

柔道も亦流派あり其流儀に依つて必ず其流儀の形有斯道の元祖

と稱せらるゝ人は種々他流の形を見、或は敎導口授を受けて、遂に一流を組立つるものなり。即ち天神眞楊流の元祖磯又右衛門先生は始め楊心流を學び次に眞之神道流を合して一機軸を出し遂に天神眞楊流と號する一派を弘む。又楊心流元祖は長崎の人にて秋山四郎兵衛と曰ひて小兒科の醫師なりしが醫學修業の爲め支那に渡りし際博轉と云ふ支那人に就きて柔術の形三手を學び得たり。

當時支那に於ては唯蹴ると突くとの形を專門とし日本の柔術とは大に違へり。秋山氏は僅かに三手の柔術形を熟練し更に活生法二十八種の傳授を受け歸朝の後之を人に傳授す然れども其手形少なき故を以て練習する者大抵半途にして廢止す。秋山氏大に之を歎き筑紫太宰府の菅廟に祈願を罩めて形手の工風を凝らし遂に三百三手を編み出したりと云ふ。又神廟の前に柳の大樹有り大雪の際に其枝に雪の積まざるを感悟して遂に楊心流と

號する一派を開く。又神道流元祖は大阪城の同心山本民左衛門と云ふ人此楊心流を學び亦工風を凝し分別して流名に上中下三段の級を定め、其手數六十八手として一派を開く。之を眞の神道流と號す。磯氏の如きも亦之と同じ。現今加納治五郎先生も天神眞楊流を學び後に起到流を吉田直藏先生に學び今講道館流を弘めたり。

柔術は形が必要なる事亂捕は劍術で云ふ道具を着けて面、小手、胴突と云ひ文字に喩ふれば草書の如きものなり。

都而何業も眞行草と三段に學ぶを宜とす。他流試合は亂捕を以て全體に勝負を附けるものなり。其の亂捕も形種々あり著者圖解を示して一般後進者に便利を與へんが爲めに記するものなり。

武藝進步に附三毒の心得

凡そ愼む可きものは三毒成なり。三毒と云ふは即ち酒色財なり第一酒に心亂れては稽古不充分なるは勿論他に種々の危險を生ず。又色慾に迷ひ博奕等を爲すが如きは惰弱に流れ自然心亂るるが故に此の三界を愼みて熱心に修業すべし。此柔術と云ふは人を害するものにあらず第一は護身の爲め運動及身體强壯に成るが爲めに學ぶものなり。酒に醉ふて他人に害を加へ色慾に狂ひて婦女子に亂暴を加へ。又は柔術を亂用して他人を驚かすが如き行爲は一切有らざる樣愼むべし。

總て藝術には上には上のあるものにて之れにて宜しと云ふことなければ成るべく上手の者に敎を乞ひ充分先輩の妙手を覺へんと心掛けて稽古をすることを第一とす。常に上手の者に稽古を賴みて自身にも亦技を研究して後進者に敎傳するを上手と云ふ。他人の稽古を見て其妙手を取りて我が短所を補ふ樣心掛くべし、自身何程上達せりとも上に上ある喩への通りなるが故に人間一

生が稽古なりと心得べし。

術を學ぶの心得

柔術を學ぶ者は稽古前には大食飲酒を堅く愼むべし。大食をして稽古を爲す時は必ず身體に害あり投げられ到れし時嘔吐を催すことあり。嘗て初代磯先生の道場の寒稽古の時は毎朝四時頃より門人寒稽古を爲すに當り何も食はず七八時の頃稽古を休み水四升餘の處へ白米六七合を入れて三時間餘を炊きたる粥二椀づゝ位を食したるものなりと云ふ。今は右樣なる稽古を爲す必用なきも常に其心得を以て稽古に當り大食せざる樣心掛くべし。稽古を爲すにも力量有るに任せ力を罩めて突張り强情になす時は術の術たる所を會得すること出來難く外の條に示す如く心を柳の枝の如く四肢は成べく柔かく動かし腰に力を入れ業を掛ける刹那に下腹四肢に力を罩め電光の如き早業を掛ける時は敵は

見事に投げらるゝものなり。師の教へ受くる時には身體を固くすべからず然らざれば術の妙味を會得せずして自身に怪我を受くる事多し。又飲酒して稽古する時は大食の時と同樣の害ありと知るべし。往昔著名の武術者にして大酒の爲に身を亡したる例枚擧に暇あらず心すべきことなり。

氣の滿つる事

氣の滿つると云ふ事は常に氣の弛み心撓む事なく弓を張りたる如くにして中心を正しく座する處を氣の滿つると云ふ。譬へば摩利支天像の如く蓋し心一なりと雖ども能く其心の六手に行渡りたるが故に皆一同に動き働くを得るなり若し心が一方に偏倚る時は必ず動く手と動かぬ手と有るに至る動かざるに於ては幾本有りても用をなさず是にては氣の滿つるとは云ひ難し故に頭

より手足の先に至る迄能く氣の行き屆き行渡りて一點の間隙なく平生充分に正しく安坐する處の有樣を以て氣の滿つると云ふなり是眞の位の第一と云ふ意なり。摩利支天の像は一體三面にて六手の動くの意なり武術も之を悟らば自然四肢も充分動き得べし是れ即ち氣の滿るにあり。

氣と體との事

氣と體と云の中に陰陽あり則ち體中に存する氣の起りを陽と云ひ亦其靜まるを陰と云ふ柔術に於て專ら氣の扱ひ方を敎へて業を成さしむると雖も之れ無形物にして外面に露出せるものにあらず唯體中に滿ち存する處陰陽なれば隨つて弛み撓みて全からざる事あり。平常安座爲したる處の心氣は漫々として所謂愼靜無事の姿なれ共動作を始め身體手足を運用爲すに至れば其業に從つて中心傾き終に平常の氣を損するものなり。故に昔日柔術

家に於て秘傳と爲したる處必ず先づ己が方寸の元氣を養ひ弛み怠らしめず事物に心氣を停むる事なく宜く萬業の基本たる處を堅固に保ち守らしむるを要すと基本既に定つて業を爲せば如何程働き動くとも元氣能く決して缺損する事なし左に力を用ふるも右の空しき事なく亦右を働かすも左弛まず前後上下に隙なくして起居動靜共に氣を損する無きに至れば眞に大丈夫と云ふ可きなり。此の咄種々あり教師用に著はす。

志と氣と力との事

志、氣、力の此三つは區別して論ずる事甚だ以て難しと然れ共今試に之を分けて云へば眼前に或一物在り是を取らんとする志の起るに隨ふて手の前へ出るは何ぞや是れ志に隨つて氣の手に通ふが故にして其物を取り扱ふは即ち氣に隨ふて力の手に集るに由るなり。又力の出づる處には氣集り氣の通ふ處には力集る事は

一定の理にして氣力不二となるものなり。然れども力を先立てて業を爲せば其害甚だ多し卽ち力を捨て唯氣の扱ひを熟練せしめんが爲めなりとす故に業熟達するに至れば人々固有の力は其業に應じ働きに隨ふて出づる事は固より敎へを待たずして明かなり。されば志、氣、力を合一するを以て不二の妙處なりとす。

弱身强壯に成るは柔術にあり

弱身の者は幼時より此の道に入れ置く時は身體の發育上を充分ならしめ體力自然に備はり且つ術を修め業を鍛練せば勝負の實地に克く勝を制するを得べく、延いては智德も進みて利益多し臆病なる者又は婦女子と雖も運動の爲めに常に幼時より斯道に入れ置けば氣を養ひ心を廣く持つ事を得べく極めて有益なり。最も初めは其の身に適する丈けを學ぶものなれば過劇なる運動にはあらざるなり。自分の身體に適する位の練習が後に至り大に

利益を得るなり。斯くして身體の發育に隨ひ好みて業を學ぶ様に成るものなり。日本男子として武士的精神を養ふは勿論婦女子と云へども亂暴者に出遇ひいかなる害を受けぬ限りもあらず萬一の際は護身の術となるなり。

世の父兄は進んで子弟を斯道に入れ給ふべきことなり。

つはものは御國と親の爲めなるぞ

こゝろみがけよ末のためなり　義爲

武術に免許皆傳と云ふ事

凡そ何武藝に於ては免許皆傳と云ふ事あり。警視廳講道館の外は師匠、先生の意に叶ひ次第に業の妙處を自得せるものには最初折紙を渡し。師より門人一同へ此度何某は折紙の腕あり依て是を渡すと申渡すなり後數年を經て形及亂捕の奥儀を極めるに至り口傳秘傳の免狀を渡すなり之れ目今警視廳にて定めし三級に

相當するものなり、此の免許に渡す巻物に乾坤の二巻に爲すも有り又天地人三巻と爲すもあり我が眞楊流は四巻を授くるものなるが極意に依りて種々の渡し方あるも大概は天地人皆傳と云ふ。他の武藝にても全般同一の事と知るべし。諸武藝中柔道が一番新らしき武術にて現今は柔術が最も隆盛を極むるなり。各府縣下に在住せる柔道教師は皆昔より師の傳を受けて今に至るものなり。又名人と云ふは自身に言ふにあらず何業にても人々に勝れたるものを指して名人と云ふ當今名人と言はるゝ人は二三人位に過ぎざるべし。

一心と云ふ事

總じて物事には一心に成るべし神道の金光教にも一心に信心せよ御蔭は我が心にありと云ふことあり。昔より武術修業者は神に祈りて一派一流を起したる者澤山あり奥を極めて一心不亂に

稽古を爲す者は何藝に於ても世に名を著はすものなり。殊に武術的のものは猶更の事にて一心を貫く事第一なり。

畏くも　先帝陛下の大御歌に

とる棹のこゝろなかくも漕き寄せむ
葦間の小舟さはりありとも

雨たりにくほみし軒の石みても
かたき業とて思ひすてめや

男子一度起たば何事も其の奥を極むるまで學べかし進めよかし。

と云ふ御意味なり

無我無心の位の事

凡そ見處のものをば直に其相手取る氣に成り形を造るは其處へ心を留るものにして是は我が心に好を求る處有るが故なり又隨つて敵あるなり例へば敵は何程取掛らんとする勢を示すと雖も

我は只眠りたるが如く敢て好まず能く心を正明に爲し泰然安座したる處の如きを以て則ち無我無心と云ふなり無我無心の所より出で敵に應じて業を行ふ事肝要なれば宜しく考へて修業すべし。是れに就ての喩言澤山あり教師用に著はす。

不動心の位の事

不動心と云ふ事は即ち如何なる事に遇ふも心の動かざるを云ふなり。心正明にして總身に氣滿ち渡り眼に白刃を見るも心には見ざるが如く又耳に大砲の音を聞きても聞ざるが如く凡て物每に驚き噪がざる心を大丈夫の不動心と云ふ。斯の如き心膽を以て我身を働かし千變萬化の術を行ひ大敵に出遇ふとも少しも驚き懼るゝ事なきを即ち眞の不動心と云ふ故に往時は生れながらにして自然大砲の響或は太刀音を聽き劍擊を以て勝負を爭ふ事の常なれば隨つて心膽の修練も出來得たるなるべし。最も其頃

にても膽力を練る爲め野に臥し山に入り又は人跡絶へたる處へ行き凡て心中の動せざる事を專一に修業爲したるもの故眞に不動心の位にも至りしと成るべし。

亦當世の修業者と云ふは多くは手足にてのみの藝にて腹の中には術なきが如し依つて此處を能く熟考して不動心の位に至るの工風を專一に修業すべし只々口で云ふ斗りでなく術の極意を究むる事を考ふべし。尙ほ引言あるも敎師用に著はす。

膽力を練磨する事

凡て武術は膽力が第一なり臆病風に誘はれて勝つべき業も其効立たず。强敵と恐るゝ時は下手の者にも負る事云ふまでもなく一眼二早速と云ふ喩への如くなれど膽力なき時は其働を一つも起す心なく怖氣附けば四肢も固くなる故に膽力の强き者が必ず勝を取ること昔より其例多し。修業中は何よりも膽力を練るを

第一とすべし。喩の引言種々あれども教師用として著はす。

沈着を守る事

總じて武術の類には諺に云ふ急ては事を仕損ずると云ふ如く不動心の無我無心にて敵より仕掛け來たる時は心を靜かにして向ふべし心周章てゝ其仕掛けを外す爲めに反つて投げらるゝ事あり。四肢の働きは早業が第一なり美麗なる勝を取るものは業の妙技に依つて先んじて敵を倒しても殘心には沈着を守り又直ぐに何を仕掛けらるゝも恐るゝ心なく、我身を守り居るは是れ武術の奥深き處なり。其内にも柔術は無手無刀なる故、敵より棒、劍何の武器を以て打ち掛かるも沈着を守り敵の得物を捥ぎ取り或は打落すが如きは我柔道の得意とする所にして常に沈着に行動するやう心掛くべし。

眼の配りの事

凡そ眼の働きは心の發動に據るものなり。故人云ひ傳へたるが如く。物を觀て其心を起すは是れ人事一般なり。人は如何なる場合害を被るやも計り知れざるが故に平生歩行するにも柔道を練習する者は前後左右に心を配り油斷無く通行するものなり。又不意を打たれて諸人の笑を受くることありては多年の稽古も其効無なり。又兩手共に五指の內親指を中に折り込み居ること を定指と云ひて必ず親指を大切にすることなり。眼の働きに依り勇氣も滿ち又業も早速に起るものにて稽古中も相手が右へ投げんとするか又は左へ投ぐるかと相手の胸中を知るは唯相手の眼の配り方にて知り得るものなれば我は其機を速に看破する樣修業すべし。

掛聲を大切とする事

劍、柔、槍、棒、長卷、凡て武藝に於ては掛聲を發する事を必要とする。打込み、投げ、拂ひ等には(エイ)とか(ヤア)又は(トウ)と云ふ掛聲を發する爲に業に勢ひ生じ又美麗に見ゆるなり。
又形に於て掛聲無き流儀あるも十中の九迄は必ず掛聲あり聲を掛くるは氣合を込めると同じ事にて受る方より(エイ)と聲を發する時下腹より自然に起るものなり。捕方に於ても(ヲー)と答を同時に發するものなり是れ氣と氣を起して勇氣の增すものなり。亂捕と云へども投る際は掛聲と共に業を行ふ同時に四肢の動勢滿つると云へば常に心に込め後進者へ稽古を授くる時試るべし。

殘心放心と云ふ事

殘心と云ふは敵に投げ倒されても起き揚る迄も心に油斷なく敵

を見詰め居るを云ふ。　放心と云ふは投げられながら投げたる者に注目しながら起き上り又更に心を起す迄の心の動かぬ處を云ふなり。都而柔術の形に於ても投げても投げられても眼と眼を他に散らさぬ樣に白眼で心に弛みなき事を殘心放心と云ふ。投ぐる方には殘心の氣を込め投げらるゝ方を放心と云ふと雖も是亦解釋すれば殘心と同意氣のものなり。

又武術の殘心と云ふことは極必要の事にて稽古中にも此の殘心の方は最も充分に修業すること肝要なり。　殘心がなき形は其人の勇氣心更に無きものと知るべし。

他流試合の心得の事

僅かの武術を自慢して只他流試合を試みんと思ひ我が力と藝術練習の爲めなりなぞと先を侮り仕合を申込むが如きは最も愼むべきことなり。諸學校生徒にして仕合を申込には何々學校の何

他流試合の心得の事

段何級の者及姓名年齢等を書き誌して仕合を行ふべし、其の時は我れ未熟なりと思はず自身の得手を相手に仕掛け見るべし必ず我が得手を先方へ知られぬ樣にすべし、餘は卷中各箇條に示す通りを常に心得居れば少しも敵に恐るゝことなし。初心の内は試合する場合には胸に動氣起り相手に業を掛くべきか掛けらるかと怖氣を生じ易し。故に場馴れたる者は七分の德あり、町道場などには隨分業の上手なる者にても他流試合其他大會等へ出席すると意外に早く負くる者あり。是れ心に臆するが故なり相手は左程强くはなかりしになどゝ後にて悔んでも其詮なし。又他流試合に出づる時は相手は强きには相違ないが常に得意とする所の業を以て恐れずに掛け其手が外れたら又此の手と自信を以て打掛りなば決して恐るゝに足らず。然し亦敵を輕く見れば我れに油斷生じ甚だ不利なれば常に怠らず修練せば强者なりとも恐るゝに足らざるべし。

稽古に相手を忌み嫌ふ事

故に多人數中不親切なる教へ方を爲す者往々あり斯る者と稽古を好まざるは一般の通有性なれど斯くては毎日同じ人とばかり稽古を爲し居りては業も不進可成多人數と稽古するを宜しとす。若し不親切なる者に出遇はゞ其者の得意の手の裏を考へて始終相手を破れば終には其者も好意を以て迎へ互に研究する樣になるものなり又自分より相手が弱くて自分の心の儘になるとて其者のみと稽古する弊往々あり是れ卑劣なるのみならず又上達せざるなり後進の者には親切叮嚀に教へてこそ武士道の意義にも叶ふなり。又他流試合の掛引等は自然會得するものなれば相手を選むが如きは稽古中斷じて愼むべし。

道場に稽古中相手を選むは上達せざる基なり。

强情は武藝の大惡と云ふ事

何事を習ふにも教師の教に能く隨ひ一心に學びてこそ眞上達するなれ身體强壯にして力量あるに慢心し木造の人形の如くに突張りなどする者は必ず其業上達せざるなり。己が身體は四肢と下腹に力を込めイザ投ぐるとか又突く引く等の場合に氣合と同時に迅速に業の妙處を現はすものなり。都而己に力量ありとも教を受くる時は從順に熱心に練習すれば熟達疑ひなし。必强情をつゝしむべし。

稽古前後の心得

道場及自宅にて假にも稽古を爲す時は大小用便は必ずも濟ませたる後稽古に掛かること萬一假死したる時大小便を洩らす事あり。大食後大酒後は必ず稽古を爲さゞること他人稽古中には極

めて靜かに見學し居る事。凡て稽古に掛かる時は立際ともに足の位置は八字型のこと。見所立ちある時は正面の所へ先に禮を爲し次に見所に向ひ一禮して其道場の中央にて雙方互に一禮して稽古に掛るべし稽古終りたる時は始めの如く見所正面に禮して引下るを儀式とす。輕々しき擧動有りて他流の人に笑ひを受けぬ樣に注意すべし。稽古終りたれば水にて能く汗を拭ひ清潔にして衣類を着用する事と心得べし。

又試合及稽古の際後進者に負くる事あるとも必ず恨む可からず他の場所にて勝つことあり勝負は時の運と諺にもあるなり。

精神と態度の事

諸武藝には更なり就中柔術にありては沈着の態度こそ必要なれ。何となれば柔術は敵を嫌はず又敵の業に倣ひて我れ亦其の氣に合せて表裏の考へを爲すものなり是れ精神の作用なれば必ず感

ずる處ありて初めて面に現はれると云ふ無形のものなり其無形物より有形の働きを神態度となる此態度こそ活動の第一指針にして禮に初まり禮に終るものなれば修業者は沈着にして最も謹みて事に當るべし。次に解く處を能く熟讀すべし。

精神―執意

禮義　信情　忠孝　喜怒　愁悲

禮の解

禮は精神の解釋中最も解し難きものにして禮は精神より出て態度に顯るゝを云ふ、然れば此の心の禮なき時は貴顯に對し亦神靈

に對する柔の術の投合する心より出でたる容姿は迚も出來ざるものと心得べき事。

義の解

義は最も柔術中十中の八九迄も伴はざるはなし義に就きて解釋すればなか〳〵限り無きものなれども是は柔術の性質として離るべからざるものなれば熟達と伴ふて自然其意の備ふるにより未熟の中は業に無理あり即ち無法の仕向を敵に仕掛けざる様注意するが肝要なり。

信の解

信の意に就きて二つあり事武藝及術の意に投合する様自得に勤むると云ひ次に信を以てする容姿は如何のものであると云ふことを心掛れば足れりと知るべし。

情の解

情は就中甲者に乙者とに關係深きものなるが故に情は愁と悲みとの似て否なるものを區別し判斷力を備ふるにて足れるなり。

忠孝の解

君に忠親に仕へて孝は其の區別を辨へる事唯形斗りとならざる樣注意すれば足れりとす。

喜の解

喜とは勝ちたるときに笑顏を現はすが如きをば云ふ。喜あれば色面に現はるゝは是れ人の常なり勝擧を愼むべきことなり。

怒の解

怒りと云ふは是物に觸れて心に反動を起すを云ふなり業の意に依れば概ね無念の怒なるが故に其心を戒しめ業を學ぶべし決して荒々敷怒氣を面に顯はすは不可なり何となれば怒らずとも鋭き眼にて其場に臨めば怒は充分に現はるゝものなればなり。

愁の解

愁は憂ふことの面の半ば顯れたるものにて悲と又同ふせざる事を注意すべし。負るとも愁ふること勿れ。

悲の解

悲は憂事の最早全部をば面に顯したるもの愁悲此の二つの區別を解して精神活動の道理を自得すべし。
此以上は單に柔術の精神を述べたるに過ぎざれば詳精は圖解に依りて會得せらるべし。

陰陽强弱之説及一身の心を論ずる事

夫敵には陰敵と陽敵二とありて其容姿にては判じ難きものあり外見弱き風情にても其實剛敵なるものあり又外見勢ひ盛んにして强氣に見へても其實却つて弱き者あり。柔術の法は一身を靜かにして變化を常とすれば一樣に云ひ難しと雖も仕合に臨みて敵の面に注目し能く其色を見てなすべし。又敵の顏色赤くなるは性氣上りたるものなり性氣發すれば必ず心に急く爲めに勝利を得る工風するの暇なし又顏色青白くなる者は心に臆したると知るべし。臆する時は身體震ふ爲めに業の活用出來ざるなり。他流試合の第一の心得は臆せざるにあり。

わが上に立つ藝術を苦にやむな
　好きの道こそ上達なるべし　古歌

八方へくばる眼のすき間なき

身に禍のきたるひまなし　著者

心の割出五系の圖解の事

心魂—心
- 膽力
  - 作業呼吸
  - 身體の發育
- 動勢
  - 修身練習

心魂とは人の心が基にて萬物に當りて皆観るものにて其心が起るものなり是れ第一の魂の基なり。種々に割出し強きにも弱きにも力むも勢も出づるなり此れを詳細に解説すれば限りなきものなれど五種に心の働きを曰ひ顯せば心より動勢である。仕合する時に當り敵を見る時は勝と云ふ心を起して勢滿るものなり

是れ心の基なり。

次は膽力にして勝心にならんと思ふ心起きたれば必ず心に力を起すなるべし。是は身體が基なり身體虛弱なれば其心を起すも其効なし身體を强健と爲し物に動ぜざるを以て基なりとす、次に著す處の體育法に依り幼年より此術を學び身體の消化を附けて次第に稽古を爲さば必ず自得すべし。卷中圖解の順を追ふて次第に學ぶべし。次に作業呼吸である是れ皆心より起りて自然業の形を造り人に教へ得るは云ふまでもなし。又武術は息切れする樣にてはならず前に述べたるが如く身體を練へ置くこと肝要なり何人に教授しても教ふる方は十中の七八度迄は投げられるものなればなり。試合に臨み息切せざらんとするには幼年より體育法に心掛くるが肝要なり。中年にて修業する人を見ても知れるものなり業は早く覺ゆるも息切れして長く續かぬものなり。又次に修身の解我が身體弱きときは到底上手名人には爲れぬも

のなれば常に讀書を怠らず智德を進むるは云ふまでもなく能く理非を辨へ仁義を明らかにしてこそ名人上手にも成り得るべければ絶えず稽古を勵み術を練磨するが肝要なり、いつに至るも他人に教へを受け居るは愚の至りなり後進を引立て自身の業を磨くが心の基なり。

道場及勝負見所の事

凡武德會又は講道館等廣大なる道場を始めとし各學校町道場の定法として玄關より右に見所を置定なり。武術は都て仕合の時は審判官見所が四角に立ち行事もありて其行事は唯業の美事に勝を得る者を指して美事とか勝負ありとか角力の行事と同じ役を務め行事見損じたる時見所より檢査する者なり。勝負には見苦き勝を取たる時は六分或は七分として全くの勝に入れず。大再び何分かの勝を得たる時前のと合て一本の勝を得るなり。

概は三本勝負の事故雙方一本宛勝を取れば後一本にて勝負が附くなり此場合行事は「勝負」と大聲を發して試合者に注意を與ふるなり。五分の勝負の時は引分になること相撲の三番勝負と略同じことなり。修業者は見所の立ち居る時は特に勝敗とも美麗になすこと見苦しき試合を爲して諸人の笑ひを受けぬ樣すべし。見所より今一本と聲の掛りし時は更に勝負を爲すべし普通の場に臨む時にも禮儀を正しく爲す事は前に充分述べたる通りなれども斯る公會の演武場にては一層注意して教師及學校の名を辱しめぬ樣注意すべし。是が肝要なり

體育より柔術に進むの心得

凡體育と云ふは近來各學校にて盛んに奬勵しつゝあるも柔術を學ぶ者は幼年の頃より卷中に示す圖解の如く順を追ふて身體四肢の働き輕快にし次第に筋骨の、自由發育を進めて投ぐる、投げら

る、返り身、打込み、受、霞、突掛、前返り、後返り、逆立、高飛等の稽古を充分に練習して後ち眞の位を自得し以て柔術に進むを眞の稽古と云ふ。凡そ何の藝道にても順を追ふて次第に業の妙を得るは已に讀者も知らるゝ處なり。此の卷中十中八位迄圖解にて著はせるも他は圖畫筆に任せぬ處ありて委しく說明出來ざりしは著者の最も遺憾とする處なり。後日教師用として補ふ處なればそれ迄は本書にある處を勉强し給へかし。術の術極意口傳、秘傳と云ふ事は斯る小册子なれども侮るべからず柔術は武術中最も高尚なるものなり。

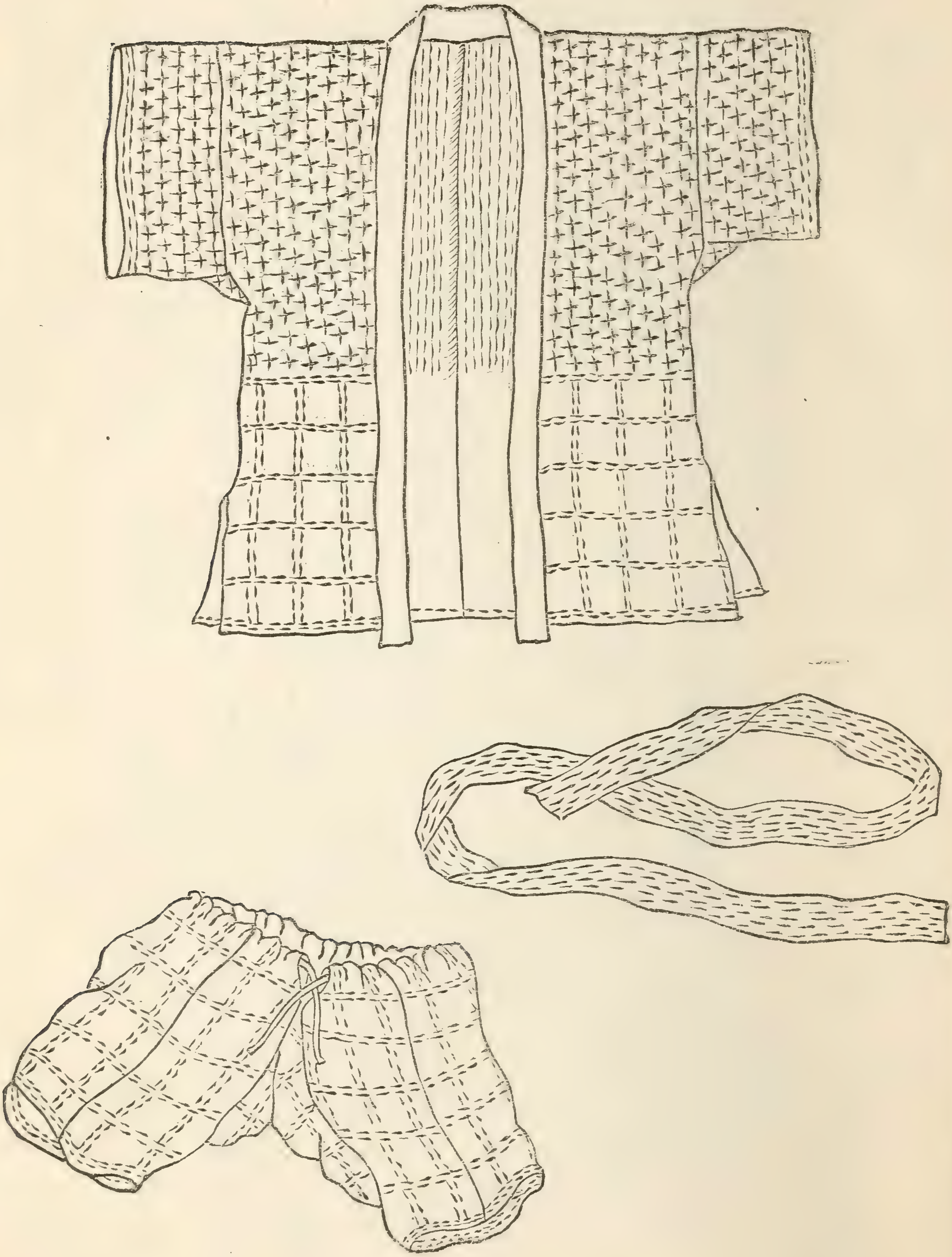
舊式稽古衣の圖解

凡そ稽古衣と云ふ者は舊來より圖式の通りにて肩より腰迄を晒木綿の白地に紺糸を以てし、肩袖は十字絞りに縫ひ上げ腰より下は格子形に二筋に縫ふ圖の如し。袖は半袖にて襟は丸巾の晒木綿を以て四つ折にし紺地に白木綿糸を以て縫ふこともあり。褌又は三味又猿股は二重合せにて上部は紐を通し半股引の如く腰にて紐を締め帶は木綿の半巾を縱に四つ折とし縫ひ合はす。縫方は木地に依りて白、黑糸を以て刺すなり段級の違ひ又は教師の夫々規則を定めて造るなり。今回著はしたるは四肢の働きを委しく見せる爲め舊式の着衣の姿を模型として寫生したり。

新式稽古衣圖解

元來我國の風俗は一般に角袖なりしも近時は外國との間交通頻

舊式稽古衣圖式



繁となり隨て世人の服裝も多くは洋服となりたるに就て我が柔道稽古衣も是れに傚らはざるべからず。

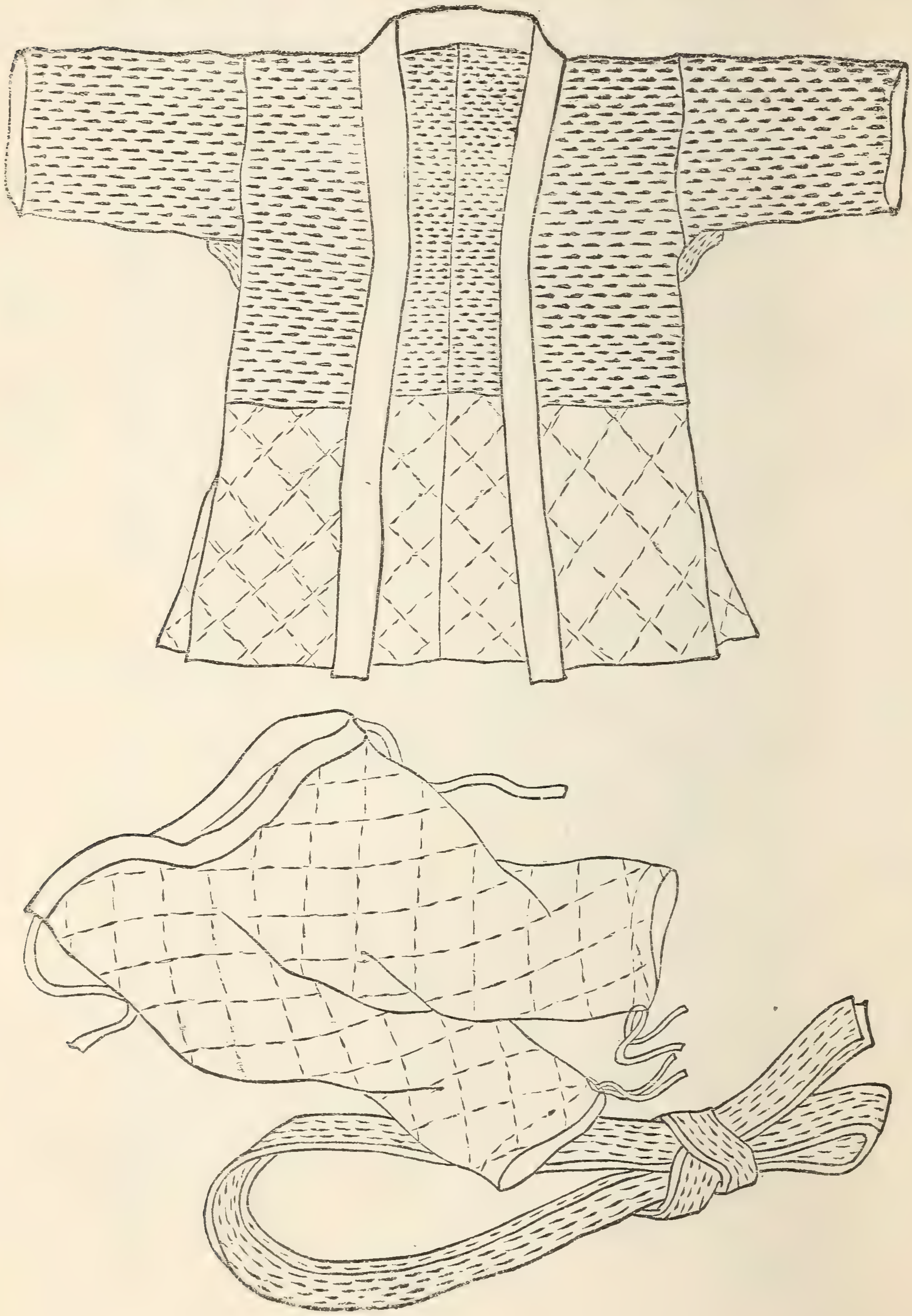
凡即ち袖短かく且袖口廣き我國在來の服裝にて稽古に馴れては洋服の敵に出遇たる時勝手悪しく大に不利なれば平常より是れにて稽古するが得策なると又近年外人間に柔術を學ぶ者年々增加せるにより可成裸體の大部分を現はさぬ爲に改良せるなり。

又則ち袖も長く筒袖にて袖口細く羣隱しも長く白地に紺糸を以て横目に圖の如く刺し上下共に長くしたるなり。八つ口の處は少し足し切を以て縫ふなり。

是舊來のに比し唯丈の長きと横に刺したるだけにて帶は從來の通りなり。「黑」は有段者「茶」は一、二級三、四級は「靑」等に區別せるは從前の通り各道場の規定に據る。

又股引は膝下二三寸の處にて紐を締めるなれども稽古の時は結ばざるも可なり。

新式稽古衣圖式



新式稽古衣の圖解

體育體操法第一圖解

凡體操は少年の頃より諸學校にて教を受けたるものと大差なし。此法を別に教授する處あれど獨學法にても本書に依り何人にも出來得る樣書綴あるなり。先づ他人と學ぶ者ある時は其道場又は自宅にても直立して兩手を充分に左右へ開き指先を延して一間四方を自分一人の操練場と定め教師ある時は教授法を以て指揮するものなり。獨學する時には第一に口を結びて下腹に力をこめ眞の位第一圖の構へより爲して順次に習ふなり。口を結ぶ時に唾吐を呑込で力を總身に入れる同時に兩手を摑り第一に頭上へ體に手を附けて押上る事點線の如くなり。第二には兩乳の上の處へ押當兩手を第三にて元へ戻すなり。數回繰り返し次に移るなり。

體育操法第一圖

第一圖、第二點線、第三點線

體育體操法第二圖解

直立は眞の位第一圖と同じ事にして前條を終りて直に又兩足は八字形の位置となり左足より一尺五六寸も横へ開きて掌を充分に押延ばして裏表揃へて數回爲し后兩手を合して點線の如くに

體育體操法第二圖

第二點線に合掌して返り居る處なり

反り返る事圖の如し。成るべく反り返へれる丈返るべし。馴るる迄は苦しき故最初は三四回を以て壹度とし然して次へ續ける

なり。

體育體操法第三圖解

體育體操法第三圖

兩手の腰部に當て返身に成りたる處

此の姿勢には最初の如く兩足の先に力を罩めて圖の如く兩掌を腰の處へ押し當て心靜に次第に後へ返へり半月の形ちの如くして轉ばぬ様に三四回行ふなり終りには腰より兩手を離しても倒れぬ様に

成るなり此の三圖だけにて體育には充分なり。

又是れより次の順を追て形を爲す時の心得を説明すべし。詳細は教師用に著はす。

柔術打込の圖解

眞之位第一圖の姿勢より打込む様なり

柔術家の打込と云ふは何流にても同じこと最初眞の位に立居より面前に敵あると假定して(エイ)と掛聲にて右手握り拳を以て前へ一足凡そ二尺迄の處へ右足を踏み出すと同時に振り上げて(ヤー)と又掛聲にて打込なり。又元の所へ右足を引着けて元の八字形の位置となるなり。又打込む時は上に心ある故陰囊を蹴られぬ樣に左手を以て圖の如く陰囊を圍むが定形なり。

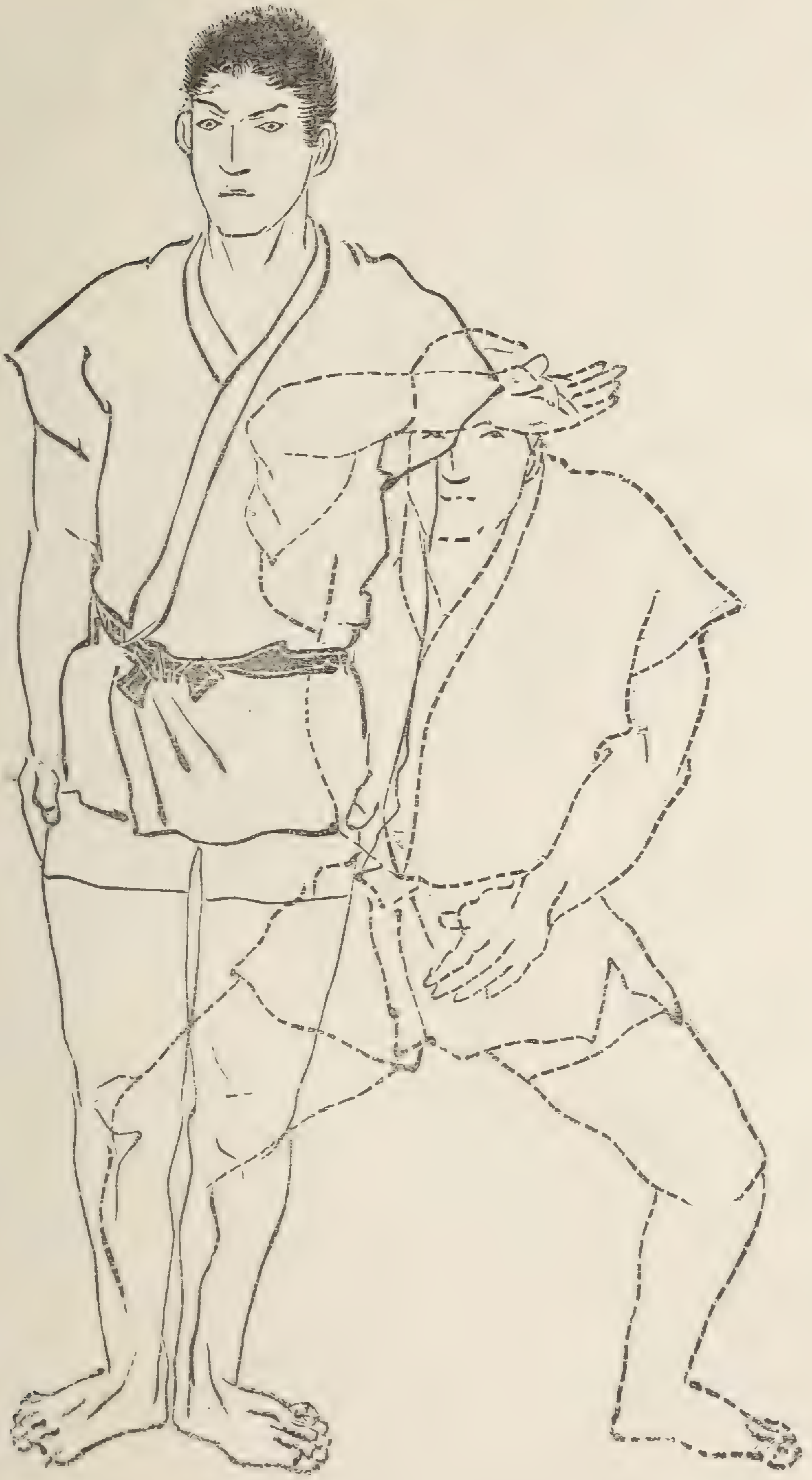
柔術片手受の圖解

凡本圖の如く眞の位第一圖の通りに立ち即ち敵より右拳を以て打込み來たるを受ける構へなれば點線の如く第二眞之位の構へになるなり。右手掌を外に向けて前額に横一文字に當て受け留め同時に左足を横へ二尺位開き腰を下ろし下腹に力を罩め打込み來たる手首を摑るなり。

柔術片手受の圖解

總て是は形に最も必要なり。元の如く直立して終るなり他に種種變化あるも形の書として後日著はす時詳細を說明す。

片手受圖



此の圖は眞之位第一の構より點線の如くに腰を下げ霞に受止たる處なり

柔術兩手受留の圖解

此の圖は敵より打ち込み來たる時に受くるの心得にて第一眞之位の姿勢にて敵より打込まれたるものとして行ふ。敵が右手にて打込み來たる時の受け方は兩手を圖の如くに組みて敵の眼を

兩掌を向にして手を組合して受留て腰を下げて足を開きたる構の圖なり

兩手の下より見るやうに爲を定法とす。同時に右足を後方斜に二尺位の處へ開くなり。

又左手を以て打込み來たるときの受方は此の反對に行ふなり。

又左り足を引て開く事もあり是は敵の出方に依る者なり形に於ては右手にて打が定式なり。

柔術霞打込の圖解

此の圖も第一眞之位の位置にて起る者なり。前に敵あると假定して右手の五指を揃て手の側面にて敵の霞俗に蟀谷へ(當身の圖にある)と稱する處を目掛けて打つなり右手を點線の如くに爲し(エイ)と掛聲と共に右足を前に點線の如くに一歩踏み出すと同時に我が左肩口より斜に前へ向へ打込を定法とす。左手は右手足の出ると共に陰囊を圍むべし。是れも形に必要なり。

正誤　此圖に點線の處は手先が今少上になる事と知らるべし

霞打込の圖

第一より點線の引續きの者なり右手先を手刀になすべし

左手は今少下にあるがよしと知られたし。

柔術突掛の圖解

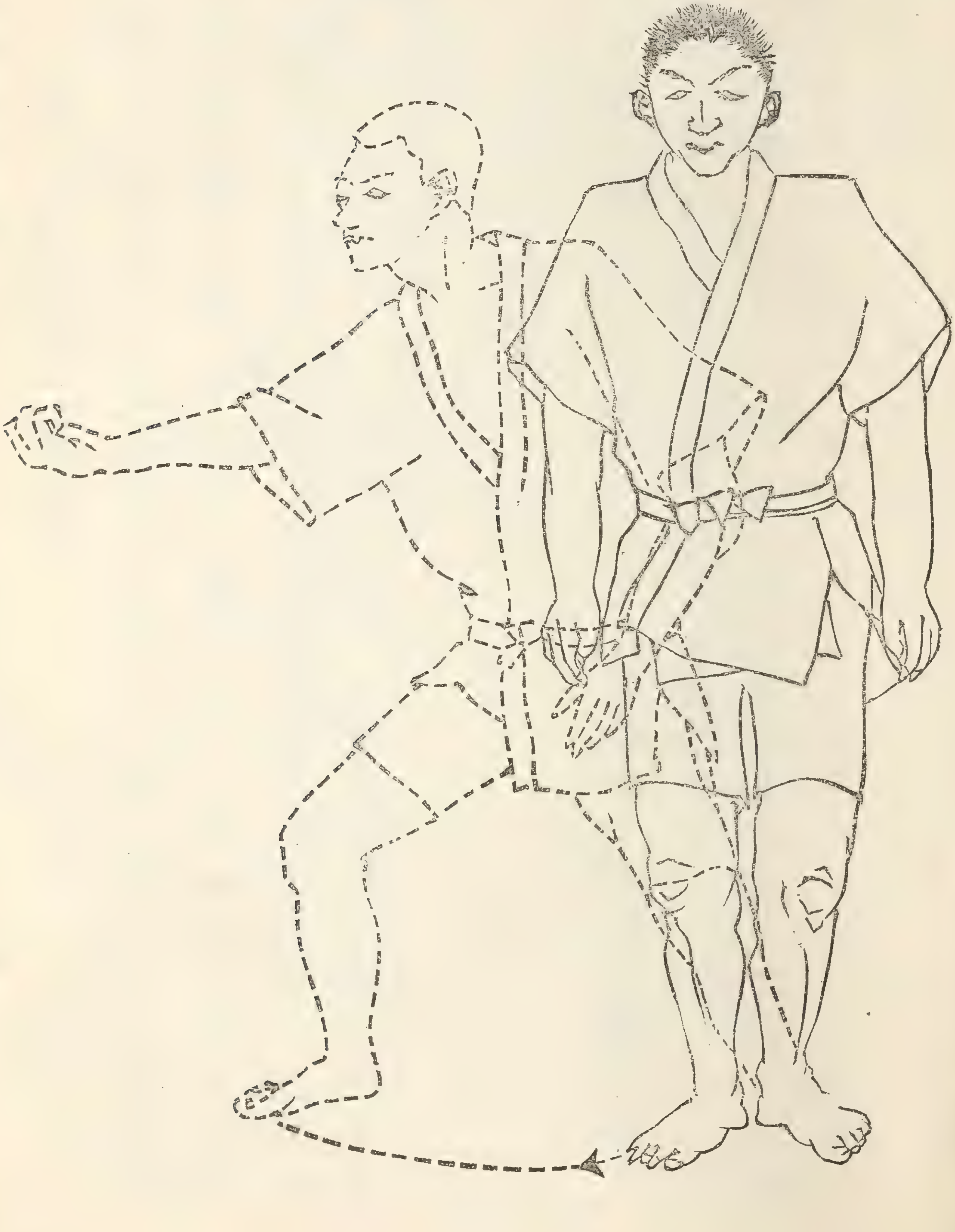
此の圖も前の霞と同じ樣なれ共只右手の違ふだけなり。横腹に附け居る右拳を敵の水月に突き掛くる心得にて(エイ)と掛聲と共に手と同時に右足一歩前に進むなり。拇指は中に折込で拳になすべきなり。是れも形に必要なり。後日教師用として著はす。

先に水月と云は當身の圖に明細にあり。

眞之位第一の構へより皆割出す處の者なればすべて此の柔術といふものは眞之位ほど大切の者と知るべし

突掛の圖

眞之位第一より右拳にて敵の水月へ當る構へなり



向へ返り第一圖解

此の形は最も必要なり。眞之位第二圖にて起り前を見て四つ這ひに斜に四肢を疊に着けて右足を眞前へ二尺斗り踏み出し同時に左手を疊に着け首を下げて自分の臍を嘗める心持にて左足を上げて右肩を疊に着ける心持にて右手を疊に着けて向へ返りる事直に引續き第二圖に移るなり。

同第二圖解

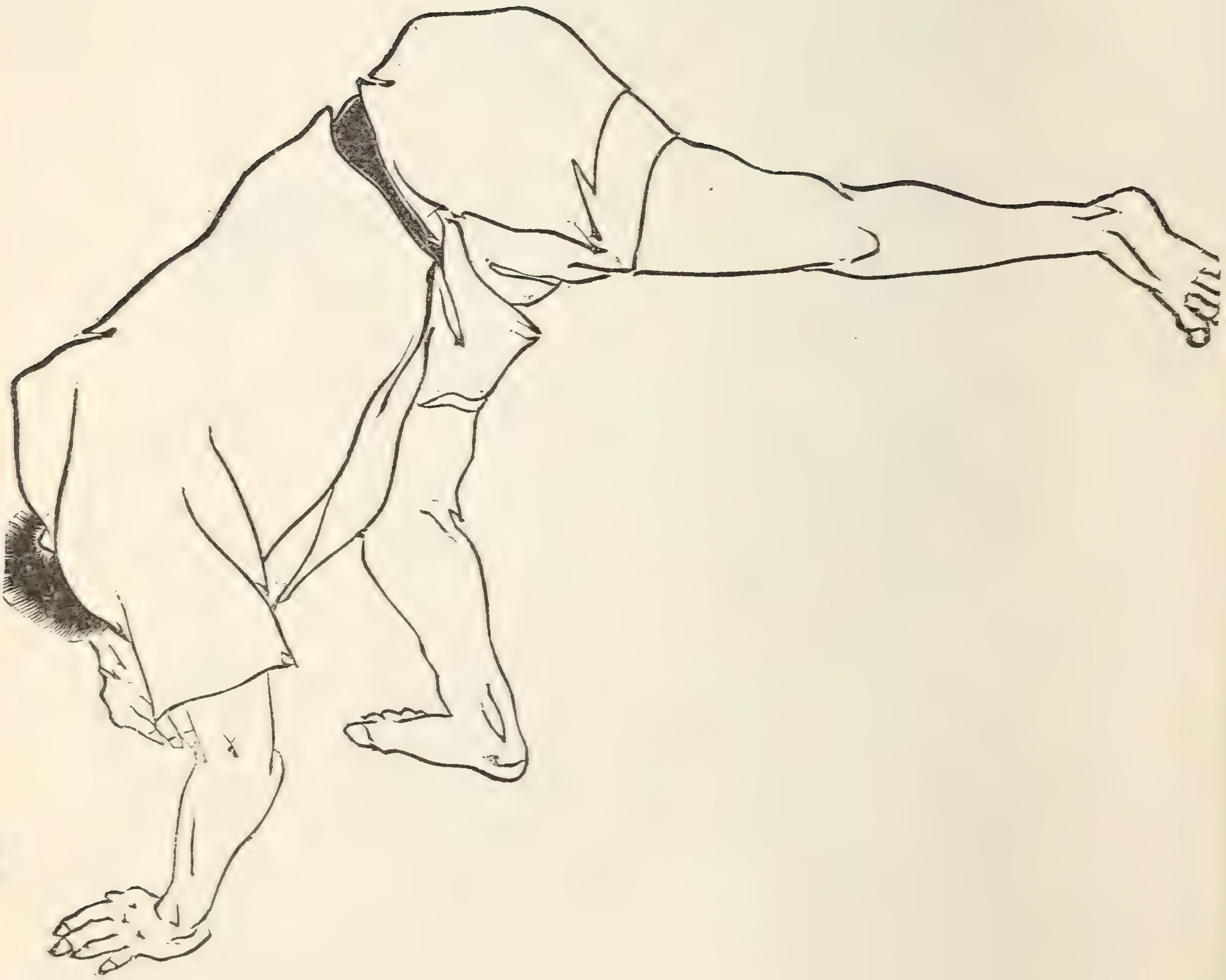
第一圖より轉ぶ時は右足前へ出で左足は曲げて左手は疊に着け右手は五指を揃へて横一文字に出すを定法とす。

第一圖より引續き轉じたれば直に左手は陰嚢を圍み右手は右股に着け立ち上る迄三拍子引續きて行ふを定法とす終らば元の眞之位第二の姿勢に成るべし。

向へ返り第一圖

同第二圖解

眞之位第二圖の姿勢より此の構へ
になり向へ返る處なり



向返り第二圖

前圖より引續て轉り起たる處なり直に點線の姿になるべし

同第二圖解

柔術後返り第一圖解

此の返り方は修業上最も必要なり。眞之位第三圖より起り座し居る胸部を突かるゝ心持にて第一圖の如く兩足を揃へて右手にて疊を打ち同時に點線の如くにし次圖に移るなり。

是に記す姿より點線の如くに兩足先に力を入兩手を疊を押附て頭より後へ返る氣になり右肩を疊に附て起る迄の事叉都合にて左肩口より起るもあり。

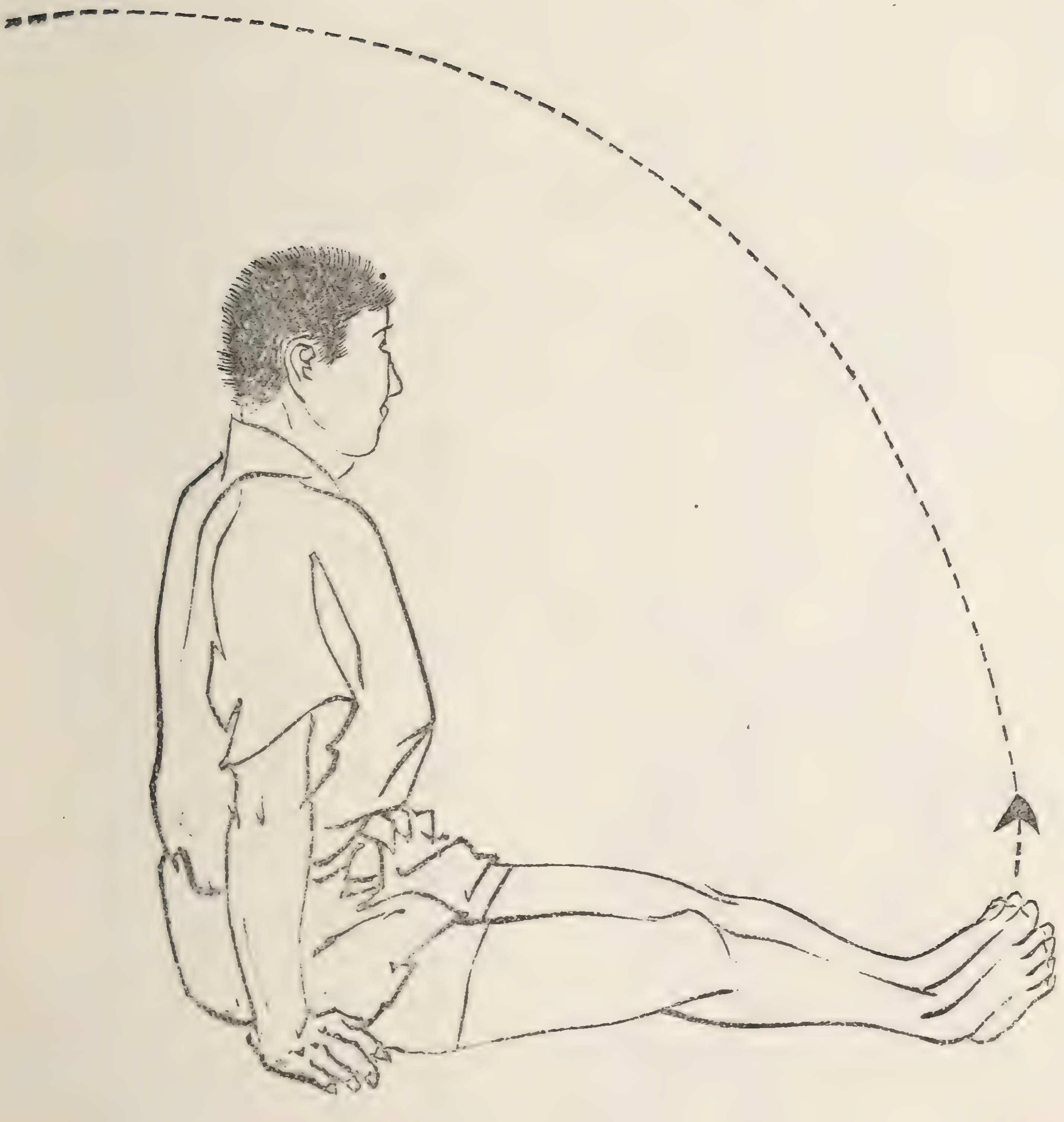
同第二圖解

右手を以て疊を打ち足先に力を込め足先より順次後方へ返り足の爪先を疊に着けて元の姿勢となるを定法なりとす。第三圖を見て知るべし。

此の處は兩足及び右肩を疊に着て左手を上に延し第壹圖より返りたる姿なり此は右側より返る處を見せたる處なり此の姿勢より直に眞之位第三の構へになるべし。

後返り第一圖

此圖は兩足に力を入既に後へ返る
點線の如くして居る處なり



同第二圖解

後返り第二圖

前圖より引續き後へ返り背部右より見せたる處の圖

同第二圖解

後返り第三圖

前面より見たる處

此の圖は後返りを前左側より見たる處なり

同第三圖解

是れは第三圖の前面なり。後面のみにては解し難ければなり。著者の親切を諒せられよ。

是處の姿勢は後へ返り左側より見たるなり必ず此姿になり毎日稽古の時返る事を充分にして置時は亂捕又形の時は大意に廣得をゑるなり。前にも云通り直に眞之位第三圖の構へになるべし。終りを附ぬ時には極めが附ぬゆへ眞之位を以て定法となすべし。

柔術逆立の稽古第一圖解

此の逆立と云ふは體育の上にも柔道練習の上にも大に必要なり。是れを學ぶには羽目板か又は柱の前方約二尺五六寸又は三尺位を隔つて立ち羽目際より一尺四五寸隔てし處へ兩手を疊に附けて横一文字に圖の如き姿勢になり首を上る同時に足先に力を罩めて跳ね上がり羽目板へ足を附けるなり。

是は兩足先に力を入て首を持上ると業が好く出來るなり。

逆立稽古の第一圖

兩掌を疊に附て向て既に逆立せんとする處なり

同第二圖解

前の如くにして兩足を羽目板に着けたる圖なり。此の樣にして中心を保てば步行が掌にて仕得る樣になるなり。

逆立稽古第二圖

兩足先を羽目板に附たる圖なり

同第三圖解

第三圖を見て知るべし腰に力を込て腰をのばし兩腕を充分に押延すべし。

逆立稽古第三圖解

此の處は逆立の姿勢にて兩手にて歩行する處なり

前の如くにして次第に馴れたれば兩掌にて歩行し得る樣になれば亂捕の稽古上甚だ德なり。何となれば敵に投げられし際兩手を疊に附け地上に體を落さゞれはなり。昔の柔術家は指先二本にて逆立を爲したりと云ふ。

常に是を馴たる時は萬事に必用をかんずるなり。

柔術車返り第一圖解

此の車返りと云ふは練習上最も必要のものなり。投げらるゝ時には身體を地に落さず起き上るに早くして好都合なり。是れを初心の内より稽古すれば體育上にも練習上にも身が輕くなりて便利なり第一圖より二三と接續して一度のものと知るべし。元警視廳世話掛にて二級なりし故中村半助氏は良移心頭流の師範なりしが此人初心者には最初此の車返りを教へたりと云ふ第一圖の如く眞之位第二圖より起りて兩手を擴げ右手を圖の如く下

にし左掌を上に向け兩足を横一文字に開き。第二圖に移るなり。

車返り第一圖

此圖は今旣に横に返らんとする處なり

同第二圖解

此の圖は寫生を裏より姿勢を見る爲に寫たる處ゆへ讀者逆に見てもらいたい右手が先に上りある時は返りて起る時は左手が先に上になると知るべし

車返り第三圖

前々より引續き第一二圖まできて直に起上りたる圖なり

左掌を地に附けて右手を疊に附けると同時に右足先に力を入れ第二圖の如くに爲して直に横に成るなり。最も是れは順序を早くすべし腰業なれば第一圖より第二圖の如く兩手を擴げたるまゝ起き上る迄は唯腰だけの働なり。是は總身を輕くして横へ〳〵と道場の廻りを數度なす時は次第に上達する最も亂捕には大必要なる事後に知るべし。

同第三圖解

第一圖より第二圖に至り此の三圖に於て壹手の形となるなり。第一は左手を上にして第二圖になり此の起き上る圖になるなり即ち第三圖は第一圖と反對に右手を上に左手を下になるなり。能く圖の手足の働き方に心を留めて勉むべし手を執りて敎ふる事能はざれば讀者熟讀して習ふべし。

柔術飛上り稽古圖解

是は高く飛び上る事の稽古なり流儀に依れども昔は最初より飛

飛上り稽古第一圖

両手を握り一足飛になす構へなり

飛上り稽古第二圖

此は飛上り力を入れたる處兩足は爪先
を下に向けるなり兩足を揃へて止る

上りを教へたるものなり。最初のうちは亂捕を教ふる前には必ず返り、反り、車返り、高飛を教へたるなり。柔術家としては體育上及柔術練習上必要なれば上達する樣稽古を爲すべし。

高飛を爲すには第一圖の如く兩手の拇指を掌の中に折り込み兩足を爪立ち爪先に力を入れ口を結びて下腹に力を罩め身を輕くし飛ぶ心得なり。

廣き地所の有處にて二尺斗の高さの土堤を築き又其上に罌粟種を蒔て次第に延るにしたがい高く飛べる樣になり舛。順次三尺余にのびる時は五尺余も飛上る事が充分に出來る事あり。

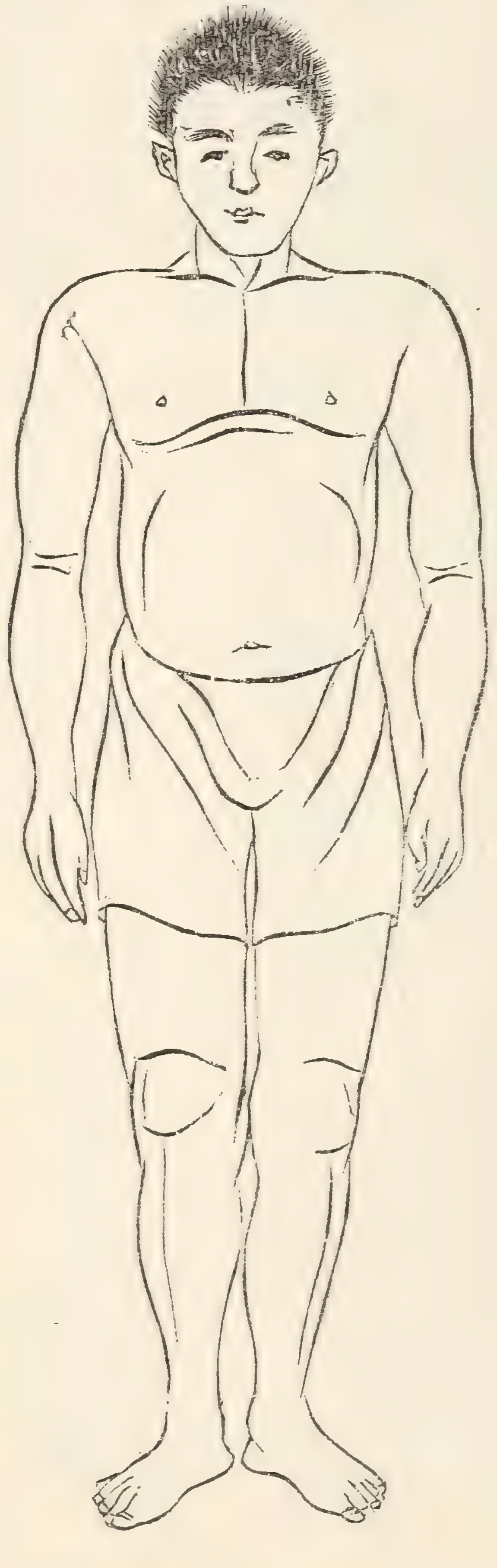
同第一圖解

兩足を縮めて飛び上り下る際は爪先を揃へ身を輕くして下るなり。此圖は飛上りたる處なり初心のものは最初二尺位の土手を

築き其上に芥子の種を蒔き次第に延て花の咲くころ凡そ二尺ほどゝなりし上を花に觸れぬ樣に次第に稽古する内に身も輕くなるなり。自宅又は道場にて爲す時は紐にて圖の如く二尺位より次第に高くすべし終には四尺五尺と高く飛ぶ樣になるべし。

柔術眞之位第一圖解

眞の位第一圖
何氣なく直立をしたるを
是眞之位第一と云ふなり



總て柔術は眞之位が第一の心得なり。

凡武術斗りでなく總身を

働かすものは眞之位取と云ふが大事なり。
此の圖は第一直立眞之位にして變化は種々あれども眞之位と云ふ事は身體傾かず中心の崩れぬ樣下腹に力を入れて口を結び無念無想に立つを眞之位取と云ふ腹中に亂れあるときは臍下の氣息拔ける故倒れ易きものなり。
此圖五種は初心者に能く解かる樣裸體を以て見せたり。
又眞之位に付此位六ケ敷事はないのです總身に力身を込ると又身體堅くなり氣が滿る又位張と云次第にて前に云ふ無我無心と云ふ心を持て氣を鎭着てする事大肝要なり。

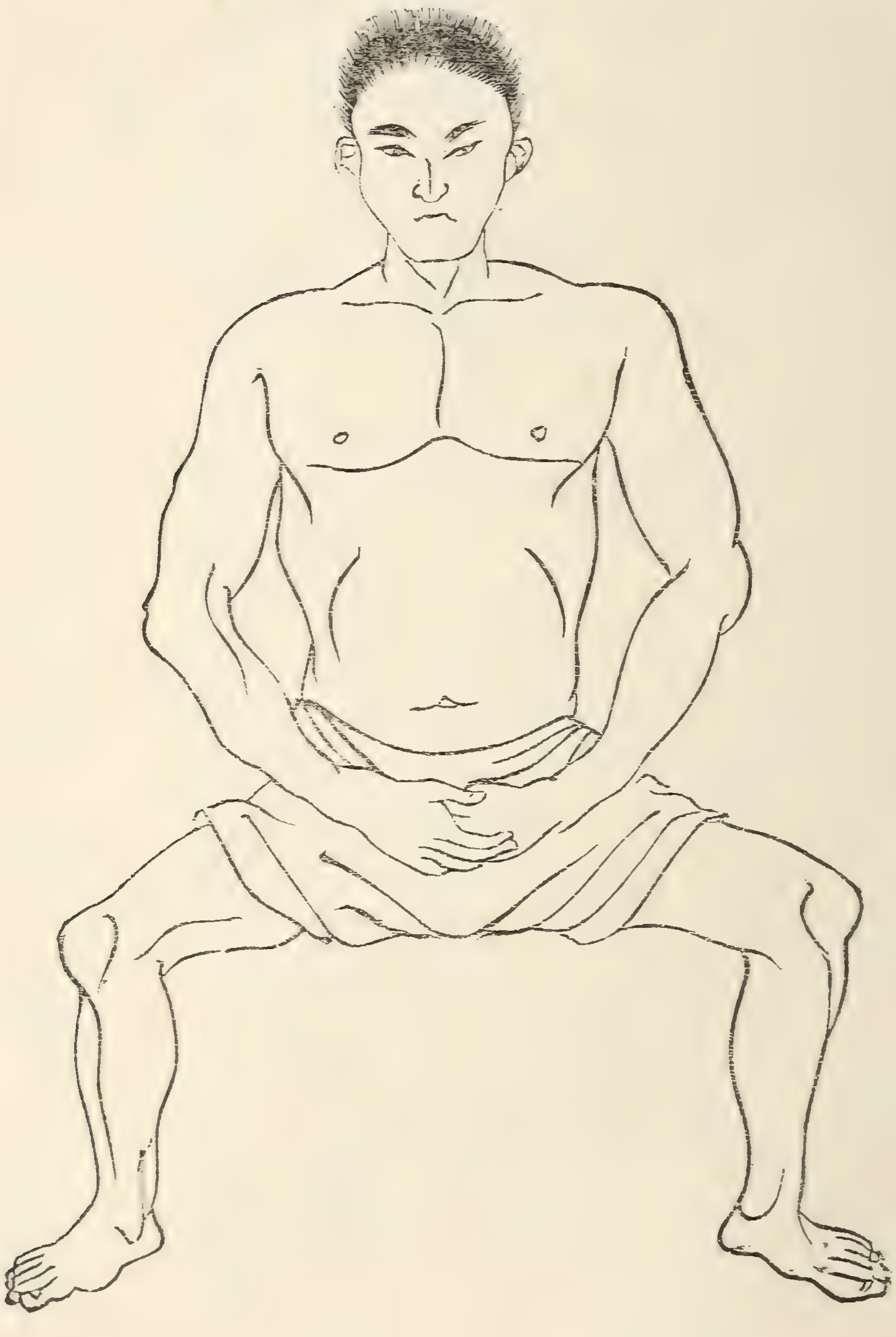
同第二圖解

眞之位の中身と云ふて正面を白眼兩手にて陰囊を圖の如く圍み兩足は橫一文字に開き爪先及下腹に力を罩め腰を少しく下げて總身に氣息充分滿ちたる處を云ふなり。

眞之位取五種とも總て形の基本なれば充分に會得すべし變化自在の構へにて第一より順次を追て巻中にも眞之位第何圖と云事

眞之位第二圖

兩肩より下腹に氣を込たる處なり



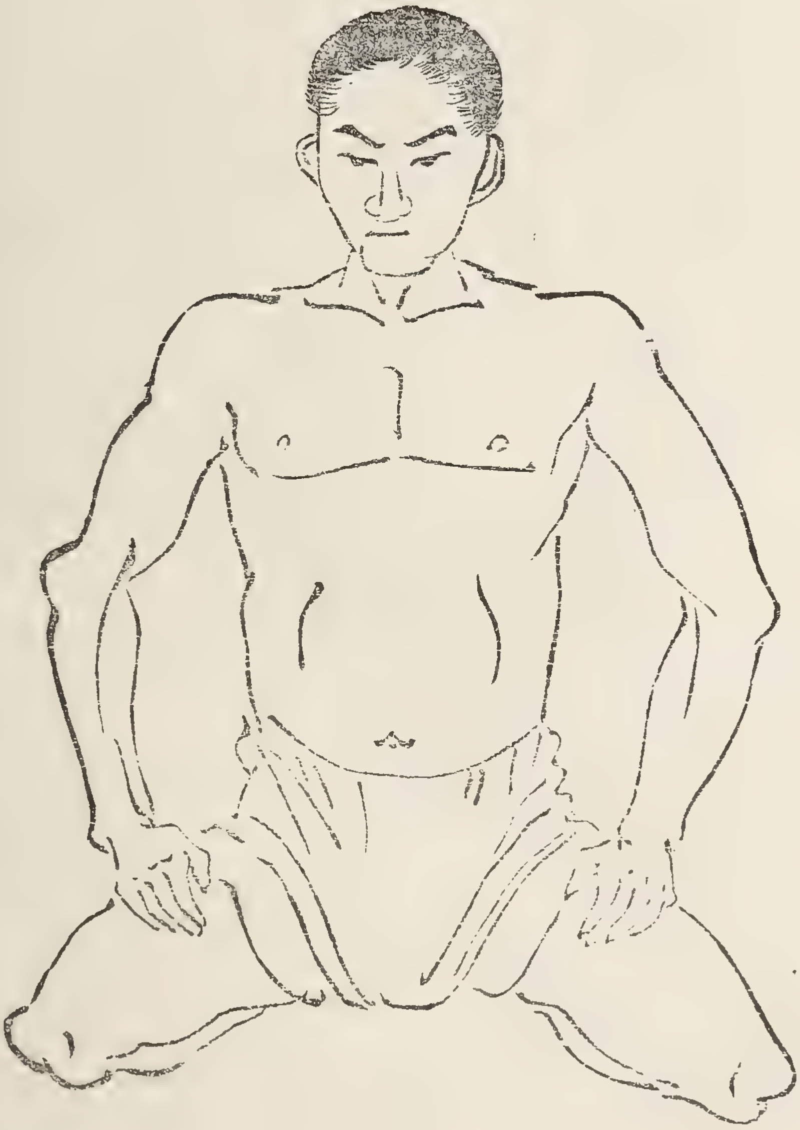
あり故に此の定式法を能く心得るべし。

同第三圖解

眞之位平座の圖なり此の構へは正面を白眼て體を眞直にし下腹に力を罩め兩膝を開きて座し兩肩を下げ兩手を股の處へ載せ口を結びて總身に氣息を滿たし中心の崩れぬ樣に爲すべきものな

眞之位第三圖

眞之位中身の構肩をいからさずに正面を見たる處なり



り都而柔術手合形及亂捕の稽古を爲すに當り位取の心弱ければ隨而て業も速かならざるものなり。

最も此中眞之位に附ては受方の構へ敵に投られるも投倒すも殘心附る迄の種々の解説あり其内にも形捕にはこの構へを以て居捕の時は大事の搆へなり敎師用の著書に充分なる解説をなす。

同第四圖解

此の形は平一文字と云ふて左膝を突きて踵を肛門の處へ當て右足を開きて爪先及下腹に力を罩め正面を見て兩手は陰囊を圍むを平一文字と云ふ。

柔術の形捕の切は必も捕方搆へにて敵に向ひ進出るも又敵を投て殘心を附るも此搆への大事なる事をしれ。

眞之位第四圖

此の構は本文に云ふ通り形捕方
の圖なり俗に横一文字と云ふ

同第五圖解

此の圖は平の搆へといふ。

第一圖の位取に兩膝を開きて地に突

き兩足とも爪立ち身體を眞直にし、下腹に力を入れ正面を白眼で兩手は陰嚢を圍むことおなじ圖の如し。

此も形の捕方の搆へにて右膝頭を疊に附て左り踵にて肛門の處へ當る又亂捕に立上り前には一時は此構へより崩れて捕に掛る者としれ。

眞之位第五圖

正面眞之位捕方の搆へを著したる圖なり

右襟を捉みたる圖

同逆捉みの圖

右襟の取り様の圖解

右襟を取るときは小指より紅指と順に力を入れ人指指は輕く握ること總じて襟を取る時は、拇指と小指に力を入るゝが定法と知るべし。

同逆の圖解

右襟を逆に取るには拇指を外部に現はし圖の如く爲すなり。此手は形及絞めに用ふるなり。亂捕の時は成るべく逆手は用ひざるが宜し。

左襟の取り様の圖解

左襟を捉みたる圖

同逆捉みの圖

右と別に違ひなし唯左襟を左手にて捉みたるだけなり。敵の襟を取るには双方共に肩より下四五寸の處を捉むを定法とすれども人には身體の大小其他の都合もあれば必ず其れとは定ず其場合に臨み定法に大差なき程度にて取ること丶心得べし。

同逆の圖解

右の逆の反對なり他に變る所なし摑み處の名稱は左右襟帶、袖口、上下八ツ口、等は一定の捉む所なり形、亂捕等は總て以上の所を摑みて種々の業を施すなり。

帶捉み處の圖解

帯を捉みたる圖

帯を逆に捉みたる圖

都而柔道稽古の時は帯は必ず前にて結ぶべし。是れは結び目が後にては仰向に倒れし時危險なればなり。

摑み方は袖襟同様に握り前後左右を圖の如く摑むなり。

同逆捉みの圖解

逆と云ふは掌を上に向け摑むを逆と云ふ掌を下に向け摑むを順と云ふなり。解り易ければ説明の用なし。是は掌が下になり居は誤なり。

喉締の圖解

此の締方は種々あり亂捕組打の時に締めるは圖の如く爲すを利益ありとす。

敵の内襟を右手の拇指を深く襟裏に入れて掴み左手にて敵の上

喉締の圖

襟即ち左襟口に拇指を襟の表にして掴み兩腕を横に張り敵の腭の下を締るを定法とす。

締方の解説は巻末の締固めの部に種々あれば此には略す。

亂捕禮式立合の圖解

禮式法には雙方東西より立ち出で見所又拜觀者に向ひ一禮を爲して四角或は東西に立つ檢査役及中央に控へ居る助技者に一禮して東西に別れ五六尺を隔てゝ相對して一禮す行事も同時に中央に出で△形に成るを三角或は魚鱗の搆と云ふ定法式に位取をなすべし。

眞の位第五圖搆へを爲して雙方注目して他に目を散らさぬ樣愼

むべし。

此の圖の如く構へ居れば行事は「しつかり」と勵ますなり。同時に一禮して立上り雙方共同じ捕方を爲すなり右手にて敵の左襟を取り左手は敵の右の袖口なり八ツ口なりを摑むなり。敵の身體の大小又は力量などを見るには前條に述べたる通り試るべし。

敵の腕前を見拔くが第一なり。

甲者一禮を爲す構の圖解

甲者敵と對顏して一禮して右掌を以て疊を打ち立上る構の圖

左の一禮をなす構の圖

乙者は甲者の顔を見て右掌を以て疊を打て禮をして立上掛の圖なり

定法式は右左りより出づると同樣なるも右より出づる者を我より上手と心得べし。上手なりとも臆する勿れ。勝負は時の運なり先が引かば我亦引いて心見るべし敵の樣子を見て常に得意の業を充分に振ひて勝も見事に爲すを宜しとす勝負濟み次第元の如く一禮し監査役及見所へ兩人並んで禮を爲し引下るを定法な

りとす。
道場に於ける常の稽古は只教師に禮して。雙方右手にて疊を輕く打ち同時に立ち上るを定法なりとす。甲乙者ともに貴人拜觀者ある時は東西の控所有も正面に向ひ前條の通り兩人立揃て立出て禮式をして下り道場の中央を定て亂捕に取掛るべし。

雙方立ち上り圖解

都而立上る時雙方は圖の如く爲すなり。是れより何業にても得意の業を掛けるなり。最初凡そ三尺程の距離を隔てゝ立ち上り雙方共に右足を一歩づゝ踏み出すと同時に雙方注目しつゝ右手を以て雙方の左襟を摑むこと前條に述べたるが如し。

襟取り居る圖

甲乙者は定式法に立上り襟と袖口の下を摑みたる處の圖なり

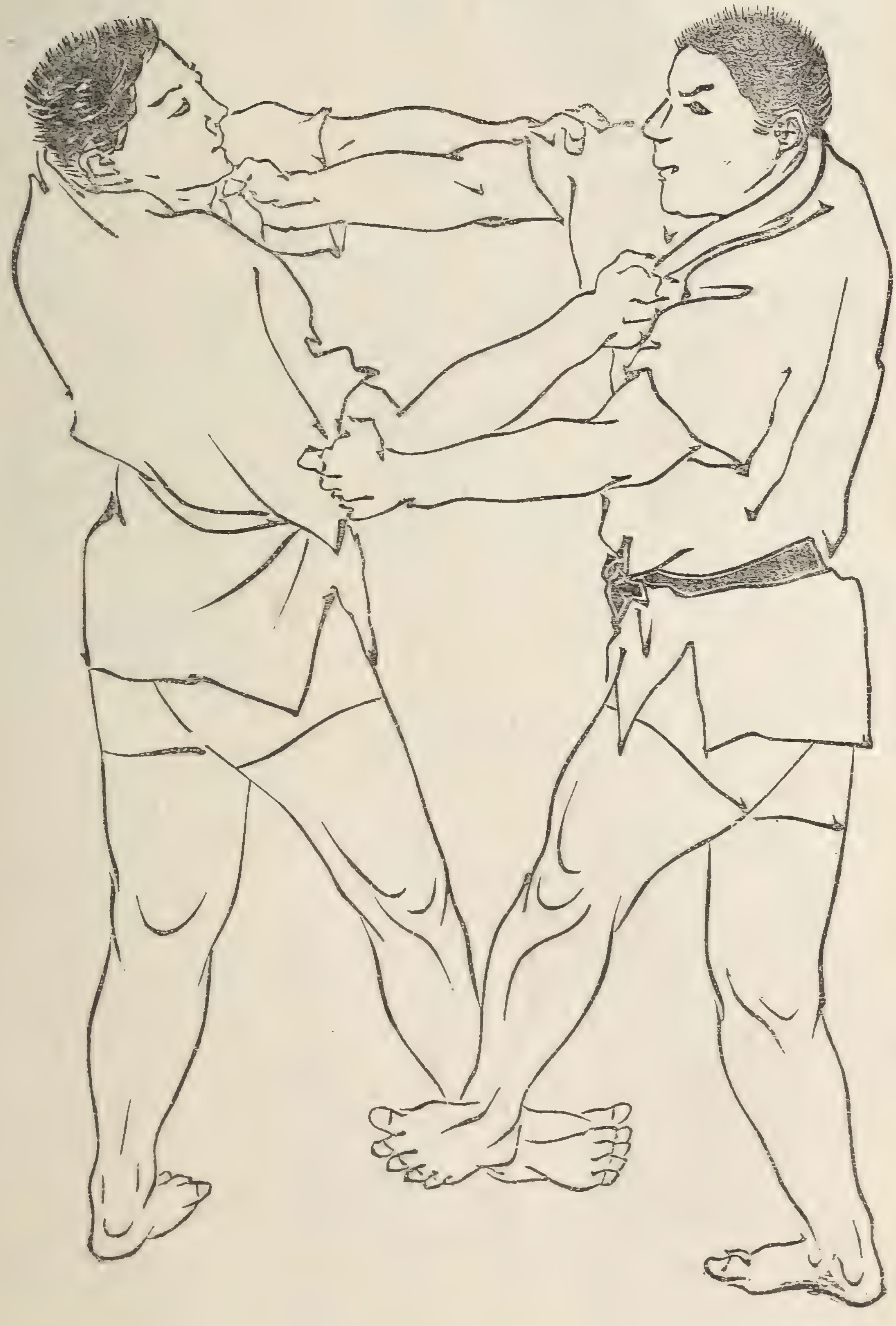
柔術足拂の圖解

甲者は乙者を我が方へ引附けて見て引き出でたる時に乙者の右

足の外踝の處を左足裏を以て掬ひ上ぐる心持にて横一文字に拂

足拂圖

甲者が右手を延して左手下へ引附て左足の裏にて横に拂ひ敵を既に倒さんとする所の圖



ふなり其同時に右手を充分乙者の左乳の上の處へ押上る樣にし

左手は下へ引きながら我が體に引寄せ乙者の身體を斜に崩し同時に右足を拂ふて倒ふすなり。注意甲者は右足先を一寸右の方へ向るべし。

柔術釣鐘足拂圖解

此の業は敵を引出して敵の體の崩れかけたるに附入り左手にて敵の右袖口を摑みたるまゝ上に引き上げ右手にて右襟を持ち上ぐると同時に我體を左へ斜に少しく開くと同時に右足を以て右膝裏を點線の如くに拂ふなり。

敵の身體を釣上る故に足に隙を生ずれば倒れ易きものなり此の形を講道館にては大外刈と云ふ。

釣鐘足拂第一圖

甲者が乙者の身體を崩して乙者の膝裏の點線の處を拂ひ既に倒さんとする處の圖なり

釣鐘足拂第二圖

甲者は敵を我が左り脇へ投たる勢を見せたる所の圖なり

敵を投げ同時に左爪先に力を罩めて(エイ)と右足を以て拂ひたると共に我が左へ兩手を廻し投る心持にて投るなり。

敵も此の拂ひ足に掛りだる時は遁るゝこと能はざれば左手にて疊を打ち體の強く地上に落ちるを防ぐべし。

柔術外掛足拂圖解

互に足の外踝の處を拂ひ試て兩手の働にて敵の身體を崩し弱腰に成る處を左足の土不踏の處を以て掬ふ樣に(エイ)と掛け聲と共に足を拂ひて倒すなり。　此形は講道館にては小外刈と云ふ。

外掛足拂圖

此の捕方は前々の足拂と同一の樣なるも敵の體の崩方を手の方にて違ひあり今外黑節の處を拂ひながらに掛る所の圖なり

柔術引込足拂圖解

敵を向へ押附くる心持にて押し行けば敵は押されじと押戻すなり其の機に乘じ敵を前へ強く引き出し同時に兩手に力を罩めて

引込足拂圖

此は文章中に言ふ所より甲者が乙者の身體を斜めに崩して引込て敵の草靡を左足の土不踏にて拂ふ處の圖なり

右にて敵の左の肩口を押し附け左手にて右袖下口を下へ引いて敵の身體を斜に挫けば敵の足に隙を生ずる故直に左足の土不踏の處にて敵の右足の草靡の處を拂ふて倒すなり。

柔術押附足掃の圖解

此の押附と云ふは前と反對にて敵を引き附る心持ちにて二三歩後へ下るなり敵も引れぬ樣身を後へ引かんとするなり其の機に乘じ敵を突き戻すと必ず上半身に氣の滿ち居る爲め足の弱くなるものなる故右手を充分延して左手は敵の右袖口の下を摑みたる儘左足の土不踏にて横に拂ふべし右手は押し、左手は下へ引き附け、左足にて拂ふ、此の三つ柏子にて(エイ)と投げ附くるなり。

押附足掃圖

此の形は前と反對にして敵を向へ押附て身體の崩を見込で直に足を拂の處圖なり

柔術内踝掃圖解

内黒踝掃圖

此形は敵の内黒踝を足の土不踏にて内より外へ大きく拂ふべし足が掛れば直に兩手にて敵の身體を崩して倒すべし

双方共に兩手は同じに取り互に引き出さんと爲すなり。敵の左

足出る時左足の土不踏の處にて内踝の處を外へ掃ふと同時に兩手にて敵の身體を斜めに崩して是れも三拍子揃へて術を施すべし。乙者は足を掛させぬやうに足を引て跳るべし。左外れたれば又右足にて爲す兩方數度して内腰を崩し兩手のきたるとき敵は必ず我が術に掛かるなり。總て亂捕の始めは斯の如くして試みるべし。この形は講道館にては小内刈と云ひ眞揚流にては内踝拂ひと云ふ。四肢の働き充分ならしむるが肝要なり。

柔術大内股投圖解

此の大内股と云ふは大亂れに組打を爲す内に我が左手は敵の前帶なり八つ口或は袖口を握り右手に敵の上襟の首際を取り兩手にて上半身を崩すと同時に敵の兩股へ我が右足を差込みて敵の左内股を押上ぐる心持にて兩足先及兩手に力を罩め爪先を左へ

斜に向けると同時に我前下へ投倒すなり敵は仰向に倒るゝなり

大内股投圖

此の大内股投は隨分と骨のをれる事故に双方共に注意を加へるべし成共稽古に注意しては上手に成りにくいから上手に向つて掛る様にするべし

試合及稽古の時は負けたる者は疊に手を打ちて負を示すべし投げたる者は直に眞之位第二圖の姿勢となるべし。共に倒るゝ時は双方身體を打附けて痛を感ずることあり故に注意すべし。

柔術內股投圖解

双方大亂に組打つ內左手を敵の右袖下なり八つ口を捕へ右手は敵の右首際の襟を捕へ兩手に力を罩めて我が體の左斜に引き附て左足を後へ一歩引と同時に敵の兩足の中心の處へ右足を差込みて敵の左足を持ち上る時は必ず腰挫けるより此の機を外さず右足を點線の如くに高く持ち上げ敵を左へ腰を据ゑて廻はし投げに倒すなり。

兩手と右足の業なれば腰弱くて敵上手なる時は己れが先に倒るる事あり。

此形は前の大內股と同じことでも前とは違足先をまげずになす

內股投圖

此の形の如くに成るときは敵の腰を挫くを第
一として我が右足先に力を入れて持上る時は
又も敵は我が左り横へ倒るものなり

此の方は足先に力を込て膝の處より持上て倒すなり。

柔術外股拂圖解

外股掃圖

此の處は敵を抱込で既に點線の如くにして敵の左股裏を強く拂ふ同時に三拍子揃へて力を入るが肝要の處なり圖を能く參照すべし點線に心を留るべし

此の圖は双方共に八つ口を取り相撲の樣に成りし時腰を少しく後へ相手を抱込み其體を持ち上ぐる心持にて爲せば相手も腰を引くなり其時又後へ我身を引くと同時に左足の爪先に力を罩めて左へ向け右足は相手の右外股を強く掃ふと同時に右手にて相手の左襟を持つて押し附け左手は相手の右袖を強く我が腰の邊まで引くなり。點線と左り足先に注目せよ。既に我左へ投るなり此形を講道館にては浮腰と云ふ。

柔術膝挫圖解

此手は前と同じなるが相手より我を押し附け來るを二三歩退きながら相手の右足に重みが乗りかけたる時我左足の土不踏の處にて—圖の如くし相手の膝頭に押し當て同時に右手は押上げ左手は強く我腰の邊へ引き落すの三拍子揃へて行ふなり。講道館にては是れを膝車と云ふ。

膝朽木圖

敵の右膝裏の處折かゝみの邊へ我が左足先が掛り
既に三拍子にて投げ倒す處の圖なり

圖と本文を能く參照すべし。

柔術拂足圖解

此の拂足と云ふは左手を圖の如くに相手の右袖口の上を取り右手を押延して敵の右襟際を摑て相手を半身に反身にて斜に爲し我體に引附んとすれば相手も右手にて何か業を掛けんと爲すにより其れに先んじて左足を成るべく左へ爪先を向け右足裏にて圖の如くにして相手の兩臑の裏の處を強く掃ふなり。

此の形は眞揚流にては股拂と云ひ又裏股とも云ふ。

稽古の時は投げても左右の袖一ケ所の袖口を摑みて手を放さぬ樣に爲すべし。

拂ひ足圖

此の圖は我より敵の背後に足を押當てたる處にして此姿勢になると同時に左手は我が左脇腹に引附右手を押延し右足先に力を込めて兩膝裏を拂ふ圖なるべし

柔術右跳腰の圖解

跳腰と云ふは相手の後の帯を右手にて掴み即ち抱き込む様にし

右跳腰圖

右膝ノ業故腰の調子にて敵
は自由に投げられる者なり

左手は相手の右袖下の處を取り右足の膝を曲げて少しく腰を下

げ我膝頭にて相手の兩膝の上を摺り上げる同時に左手を強く引て相手を我が左前方へ落すなり。圖の如く左足先に力を罩めて爪先を左斜に向て術を行ふべし。

柔術左跳腰の圖解

凡て柔道の業は左右何れにても出來得るなり。亂捕には尚更にて右に掛けて外れたる時は直に左に掛けるなり。

此の形は右手にて相手の左上襟を取り左手にて腰帶を摑み抱き上る樣になして同時に左膝を曲げて相手の臍下へ押當て相手を我が右斜に引附けて我が曲りたる膝にて跳ね上ぐるなり。

右足先に力を罩て右前に倒さんと思ふときは右の方へ斜に右爪先を向けて立つを定法とす。

相手は美事に我が前に倒るゝものなり。是を左膝落とも云ふ。

此手は近頃流行の手なるゆゑ下手者に試みるべし乙者も直に手

を打て仰向に倒るべし。

左り跳腰圖

此圖は左り掛の處なり相方の四肢の工合を能く能く參照すべし

柔術連行の投第一圖解

此の形は入り亂れて戰ふうちに隙を見て相手の襟首を左手にて摑

行連の投第一圖

此の乙者に手の掛りたる處を能く参照すべし

行連の投第二圖

我が背後に倒したる處乙者は左手を打て倒れたる圖なり

同第二圖解

むと同時に我は右膝を突き直に右手を以て相手の右股を下より持上げ相手の體の崩るゝ機に乘じ摑みたる襟首を強く下に引くなり。初心の内は投げたる相手の身體にて踵を打つ事あり故に倒すと同時に立ち上るも差支なし。直に眞之位第二の構になれ。

同第二圖解

左手にて我が左後へ引落し右手は相手の右股を押上ぐると同時に我が左足の膝を越へて相手は仰向に背後に疊を打ちて倒るゝなり。是れは左右何れを行ふも可なり。

殺當流の形より出でたるものなり。

第一圖及第二圖迄の處をば挿畫を能く參照して業をおこのふべし。

柔術引込業圖解

此の引込業と云ふは双方三尺餘りの距離を隔て氣合を計りて相手の右手首を我れより先に敵を引摑み引込む時は身體の重みにて右足を集まり中心傾きて倒れかゝるなり。是又圖の如くなりし時透落なり背負投なり種々業は掛るなり。是れを解かんとするには五指を揃へて爲し指の先に力を入れ(エイ)と一聲斜に下すなり如何なる强力の者と雖も解けるものと知るべし。

我も亦相手が解かんと爲す前に早く業を掛くるなり。

總じて武術は先ずれば人を制すと云ふ喩の通り心を靜に相手に先んじて速に業を掛けるが肝要なり。

引込業圖

乙者は甲者に引かれる時に堅く成らぬやうにな
すべし身體かたくなると甲者の業に掛る故なり

甲者敵の手首を引附けるには
下腹と四肢に力を込めるべし

柔術首投の圖解

是は相手が我が胸倉を左手にて取るを我が右手を高く延して相手の腕を押下げて外れたる時に相手の左脇下へ右腕を指込みて相手の顎に五指を―圖の如くに掛け同時に左手を相手の左股を下より持ち上げ我が身體の右後へ開くと同時に(エイ)と掛聲と共

首投の圖

甲者は右脇へ乙者を廻し投に倒すなり
乙者は右掌を打て仰向に倒るべし

に投げ出すなり。

此の首投は淺山一傳流の名人故金子勝平先生得意の手なり。圖にも記せし如く最初は對顏して居升が右腕を掛るとたんに此姿勢になる此業は隨分と美事な形なり。

柔術蹴落し圖解

是れは前圖の引込業より續くなり双方距離約三尺を隔て第一眞之位の構にて起り相手の右手首を左手にて握り我體を同時に魚鱗へ引き右掌を相手の右乳の上の處へ押當て左足を一歩深く踏み出すと同時に右足を上げて相手の右股裏を強く拂ふなり。是れを裏落とも云ふ。

相手が仰向に倒れ掛る時は左手を引き上げ右手は押し右足を上ぐると共に(エイ)と一聲投げ附けるなり。

甲者は圖の如くの形ちになる時は乙者が堅くなるほど敵は強く

蹴落し圖

甲者は既に乙者の股裏を同右股に力を込めて
仰向に倒す處なり圖を能く參照すべし

仰向に倒るべし。乙者も左掌を打て仰向に倒ると心得るべし。

柔術透き落し圖解

我が身體二尺斗り左斜に引くと同時に相手の左袖下を摑み居る手を我が體へ引き附け右手にて相手の左肩口襟首際を取り手を延ばして相手の體の崩れたるを見て腰を引きながら四肢先に力を入れ左へ斜に投げるなり。此の業は互角の者以上には骨の折れる業なり充分に修業して妙處を自得すべし。講道館にては浮落と云ふ。

透き落し圖

甲乙者共に此の形は充分に能く掛りますから自得すべし

裏股拂圖

柔術裏股拂圖解

互に業を戰はし居る內相手の身體を斜に崩して我左爪先を左へ

向けると同時に左手に摑みたる相手の右袖を下に引附け相手の左襟を取りたる腕を押延ばし同時に相手の太股裏の處を我右脛にて爪先に力を罩めて掃ふべし。

相手は我左前方へ仰向に倒るゝなり。講道館にては大外落と云ふ少し違ひあるも大抵同じなり。

柔術横車圖解

此の圖を初めに能く見て取組の樣を會得すべし。

双方數度業を戰はし機を見て相手を三四歩後方へ引附け相手の引かれ來るに附入りて直に左手にて摑みたる八ツ口を我が左腰の邊へ引き附け右手に相手の左襟首際を持ち上敵の體を斜に崩すと同時に左足の土不踏の處にて相手の右足横を(エイ)と掛聲と共に拂ふて我が左隅の處へ投倒すなり。腰を捻る時少し右へ爪先を向けると業が綺麗見事なるゆへなり。

横車圖

此方の圖は寫生の内にも能く取つてあるから
圖の處をば能く參照すべし

此の横車と云は隨分諸流にても必ず有手なれば掛方をばなるだけきれいになすべし敵の體の崩し方が肝要であり四肢の業の内にも他流で多く用ふる手は成だけきれいにするを妙と云べし。

柔術矢倉落第一圖解

此の方は寫生の内にも實に能くできてあり參照すべし

矢倉落第二圖

甲者は我前に乙者の躰を投落乙者は左手を打て抑向けに倒れたる圖

此の形は最初に行ふものなり双方相手の様子を見計り第一圖の如く我が左足を後方へ三尺餘引きて膝を突き爪先を立て右膝を圖の如く立て腰を下げる同時に左手に摑みたる袖口を左隅へ引附るなり。右手は一旦引附て直に押上ると共に相手の足を我が足にて妨げ其體の崩れたる處を左手にて引落すなり。

同第二圖解

此圖は我が前へ引落したる處を示すなり。相手は左手を打つて倒るゝなり。

總て背負投、股投、衣被等の業にて相手を投げても我身は眞之位第三圖の如く構へて左右の袖なり襟なりを片手丈は持ち居る事を失念すべからず廣き道場に於て多人數稽古を爲す場合遠く投ぐると他の者に突き當る等の失態を生ずるなり。

柔術背負投第一圖解

背負投第一圖

甲者は乙者より打込できた腕をば次圖の如くに直になるべし

背負投第二圖

甲者は乙者の腕をかつぎ上げて直に我が腰をなめる
氣に我が前へに倒すべし

同第三圖解

此の處は兩人ともに首の繪が上りすぎて居る故
に寫生の時に寫すのに困りし故と察しられたし

相手が右足を一歩踏み出すと同時に右拳を以て我頭を打つて來るを我が左腕を横一文字に構へて受け留め直に左手にて相手の右手首の處を摑みし第二圖の如く速に腰を下げ摑みたる右手を持ち上げて相手の腹部の處へ我が背を當て第二圖に移る。

同第二圖解

右手は相手の二の腕を摑み兩手に力を入れ兩足は眞之位第二構へと爲し第三圖に至る。

同第三圖解

第二圖より引續き背負投になす姿勢なるも是は寫生が充分に取きれず兩人の首が上りすぎて居るゆへに繪に首を上げると書づらきゆく此の第三圖は小書を能く讀み玉へかし。

此の圖は横面を見せたるなり。我は相手の右腕を被ぎ込むと同時に左足を左後方へ引いて我が股を覗く心持にて投ぐる時は相手は向へ遠く投げらるゝなり。

同第四圖解

此の投げたる圖に注意すべし。第三圖の如くに成ると同時に(エイ)と一聲我右肩を透して腰及兩手先に力を入れ相手の腕を早く外すべし遲くては相手と共に倒れて怪我をする事あり注意すべし。

同第四圖解

背負投第四圖

甲者は乙者を向へ仰向に投げたる處の姿勢なり

乙者は左手を打て輕く倒るべし

同第四圖解

柔術衣被投圖解

双方入り亂れて術の妙を戰はし居る內相手の兩胸襟を右手にて一所に摑み相手を向へ押附け其の腕の下を相手の兩脇の下より潜り同時に我が右膝を突き爪立ちて左足を左後方へ大きく開き左手は相手の左足の向臑の處を持上げ我が股を覗く心持にて頭を充分に下げ右は引落す左手は跳るの三拍子にて(エイ)と一聲投げ附くるなり。

相手も投げらるゝと知らば右手は掌を外にし己の額の處へ附圖の如くし橫に爲し右足を踏出して倒るべし。

此の業は眞揚流の形にあり背負投と云ふ流派もあり。　矢倉落の第二圖と唯足の位置が違ふだけなり。

衣負投圖

此の手は諸流に形の内にも有る手なれば亂捕にも能く用ふる者なるをしれ圖を能く參照すべし

眞捨身第一圖

柔術眞捨身第一圖解

此の形は相手の兩襟を兩手にて取り押し行けば相手は押されじと押し返へす力を利用し左足を相手の兩足前に留め右足先を相手の臍下に押當て直に臀を疊に附けて第二圖の姿勢に成るなり。

同第二圖解

兩手を少し縮め左爪先に力を入れて兩手は我が胸の處へ引附け右足は跳ね兩手は相手の頭を我が胸の上に引き落す心持にて(エイ)と一聲三拍子揃へて次圖の姿に移る。

眞捨身第二圖

甲者は既に乙者を投んとなす此姿勢にて右足を押延す兩手は我が胸の處へ引附る處なり

同第二圖解

同第三圖解

兩腕に力を入れて引附ると同時に右足先を押し延し左足は疊に附けて兩足先に力を罩

眞捨身第三圖

め跳ね飛ばしたる圖なり相手の身體は我が頭部の上にて廻轉し足先圓く畫きながら背中を疊に附我が頭の前方へ倒るゝなり。

同第四圖解

乙者は片足を折て居ますが都て倒るゝ時は片足にて蔭袋をかこむべし

眞捨身第四圖

甲者は兩手を放ちて右足より直に起
て眞之位第三の構へになる

同第四圖解

此の手も一より四迄を連續して一手の形なり。次に注意

我は臂を少し持ち上げる位に相手を跳ね飛ばすも兩手は放さゞるを宜しとす。相手が兩足を疊に打ち附けて全く倒れたる後兩手を放して立ち起上るなり。業を掛けたるものと掛けられたる者の位置寫生の都合上反對となりしにより讀者其心にて見られたし。

柔術立捨身投圖解

此の形は眞捨身とは違ひ立ちたる儘にて捨身を掛るなり相手を隅へ押し附け行き右手にて相手の兩胸襟を摑み左手は逆に前帶を取り右手は押し延ばし左手は我が前へ充分に引附けて相手の身體を反り身に崩して直に我が右足を相手の兩足の間に入れ左足は其儘に爲し下腹に力を罩めて我身を反對に半月形の如く充分に反りて相手の身體を我が頭上を越して後方へ投げ飛ばすなり。

立身捨投圖

此の業は甲者が上手なれば實に美事な手形である下手をやると乙者の肩首を打す事あり乙者も早く倒るゝ氣になり手を打て倒るべし

實地の場合には充分遠くへ投ぐるなれど稽古の時は充分注意して業を施さゞれば怪我をするなり。

柔術横捨身投第一圖解

横捨身投第一圖

此横捨身は實に寫生しにくき者故
掛口文を記す圖なり

横捨身投第二圖

諸流に此の横捨身はなす處ゆへに又畫圖にもこ
まる處あるに故此位で略す

同第二圖解

此の横捨身と云ふは相手の上半身を崩して左脇へ我が右足を踏み出し又左足を以て相手の右膝を押附けて相手を釣り込みながらに我より倒れる體の重みと右足を以て投げる事第二圖の如くなり。

同第二圖解

相手の踏み出す右足を我が左足にて妨げ同時に反り返つて我身を後方へ捨て身體の力で投げるなり。

此の業は最も四肢と腰業につき實に書畫にて云事眞につくしにくき者故に上手に附て敎を受るか又敎師に附て覺るべし諸流ともに此形はある手なり。

柔術盤挾投圖解

盤挾投圖

此形は最も他派の掛りやすき手にて常に此の形を充分に稽古を勉強すべき者なり

是れは相手の右袖口の上を左手に摑み左足を相手の臍下の處へ突き出すと相手は必ず足首を握るなり。然れば直に右手を疊に突きて横に倒れ圖の如く右足先に力を入れて相手の膝裏に押し當て兩足を挾み左手は左後方へ引附右足先に力を罩めて相手を後へ引落して投げ倒すなり。此の手は隨分美事に投げ得るものと知るべし。

眞揚流にては故吉田千春先生最も得意の業なり。

柔術俵返圖解

此の形は立捨身と反對にて相撲の大間貫と云ふ形になり相手が我が腰帶を持ち業を掛けんとする時我は又相手を上から抱き込みながらに下腹に力を入れ足は眞之位第二圖の構へになり我身體を半月形に反り返ると同時に(エイ)と掛聲して兩腕に力を入れ我が頭上より後方へ相手を抱上げ投げ附くるなり。

總じて頭を越して投げる時は必ず首を左右何れにか傾けること

俵返し圖

此れは能く人のやる手なれども見所の
立時は注意すべし

柔術俵返圖解

なり投げらるゝ者も共に注意を要す。

柔術背負落第一圖解

背負落第一圖

此の背負落し類は山澤あり追々讀者の巧風をなすべし

背負落第二圖

甲者は我右肩より投倒して直に腰を眞之位第二の構へになる乙者は左り掌を打て仰向に倒れし圖

是れは右上袖を左手にて摑み右手にて相手の左襟を取り相手を左向ふ隅へ押附け兩手を持ち上ぐると同時に右より相手の腹の處へ廻り込むと共に少し腰を下け圖の如く前へ跼むと同時に總身に力を入れて(エイ)と掛け聲して背負落すなり。

同第二圖解

相手を我が前へ背負落して相手が再び立ち上り手向ひ來るを待つ心得にて居るべし即ち眞之位第一圖の構へになり。

最も此の二圖は能く出來てある寫生に附圖を能く參照すべし

柔術山嵐投第一圖解

前のと稍同じ様なるも是は相手を前に引出して直に右手を以て相手の右肩口の稽古衣襟を摑み左手は相手の右袖口を取り同時に我が腰を少し下げて圖の如く姿右太股より足先に力を入れて

山嵐第一圖

甲者が既に敵を投んとする圖なり

相手の右太股に掛け足先きより持上げて相手の身體を浮せ同時に我が肩に掛け背負投げる心にて我が前へ引落すなり。投げる時左爪先を左斜に少し向けると美事に投を見へるなり。

同第一圖解

此の手は背負投拂腰等を合併たる樣な形なれども此れは兩手足腰の業にて投げるときは美事にて常の稽古の時試るべし。此業は相手を投るも稽古の時は片手は袖口を持ちて居るを宜しとす。此の山嵐と云ふは講道館にて附けたる名なり。揚心流、眞揚流、關口流にては山落と云ふ。最も此形を他流にて能くする者ゆゑに大略の文章にてしめす事なり。圖を能く參照すべし。

山嵐第二圖

敵を我前に投倒して左り袖口を持居る處

手操り投第一圖

敵をかつぎ上げたる處の圖

柔術手操投第一圖解

此の手操投と云ふは前の背負落と略同様なり。是れも相手を釣

手操り投第二圖

乙者は倒るゝ時左手を打て仰向に倒るべし

り出して背負投げるの心持なり我が體が相手の身體と二尺餘隔ち居る時に左手は相手の右袖口を取り右手は相手の左上襟を逆に摑み圖の如に相手の腹を我背中に載せ兩手を引くと共に下腹四肢の先に力を入れ(エイ)と一聲我が前へ引き落すなり。

同第二圖解

相手を投ぐる時に左足爪先を左後へ向けて我が前へ相手を投げ直に起き上り打ち掛かり來るも差支なき即ち眞之位第二の構へにて下腹に力を罩めて構へ居るなり。

柔術腰投第一圖解

我が右腰を相手の腹部へ差入左手にて相手の右上袖を摑み右手

腰投第一圖

此の圖は入腰と略同様なり

にて相手の左後方帯を摑みて押し相手の押返す力を利用し左足

を相手の右足右方に置き右足を相手の兩足の間へ突き込むと同時に腰を跳ね上げ左手を強く引くなり此の三拍子を揃へて行へは美事に倒せるものなり。

同第二圖解

腰を入て敵を抱上たる處の圖

柔術右入腰投第一圖解

我が腰の入掛たる處の圖

足先に力を入れて左手を引き相手を抱へ込みたる圖なり我が前へ落し投げるなり。相手も左手を打ちて倒るべし都而腰業は手を引く時に兩足の先に力を入る事なり腰の構へは眞之位第二圖の如き姿勢になるなり。

此の入腰投と云ふは左手にて相手の右の袖下を摑み右手にて相手の左襟首の處を摑み兩足を揃へて相手を少し押し附け行き押返す力を借り直に腰を臍下に入れ跳ねると共に左手を引き右手は一旦押して引く心持にて(エイ)と一聲我が前に引き落すなり。

同第二圖解

相手を引き込んで我が腰を下げ跳ね上げて前へ投げ倒れかけの圖なり。兩足は爪先を八字形に踏み投げ終らば左足を約一尺餘り横に開きて構へを爲すと知るべし。又投げられたる者は左手を打ちて兩足先と共に倒るべし。最も此投形は都而同構へてに投倒す者と知るべし。

右入腰投第二圖

柔術左入腰圖解

此の圖は前の二圖とは反對にて我は右手にて相手の左上袖を取

り左手は後帶を持ち相手の右より我が腰を深く差入れ相手を抱き込みて我前へ(エイ)と腰を跳ねると同時に右手を右腰の邊まで

左入腰圖

左に抱込既に投んとする圖

引き附け前の第二圖の如くなして我が前へ引き落すなり相手は右手にて疊を打ち仰向に倒るゝなり。

柔術大腰投第一圖解

此の圖は前と又反對にて左手にて相手の右袖口を摑み腰を少し下て右の方へ入身に腰を持ち上る時は必ず相手の身體崩るゝ故

大腰投第一圖

敵を抱込既に入身になりたる圖

に右手を敵の右腰の邊を抱込兩足先に力を罩めて引附くると同時に腰を跳上る時は第二圖の如くなるなり。
第一圖より第二圖に至る姿勢を能く見るべし。

同第二圖解

此の第二圖も前々と同様なるが兩足の踏み處が少し違ふなり。入腰、腰投、大腰等は大略同じ業なるも少しの違ひある爲め名稱も夫々違ふなり。
我が左前へ引落て投げ倒せば相手は兩足と左手とを疊に附けて仰向に倒るゝなり。

大腰投第二圖

腰を切上抱上て既に我が前に投げ落す處の圖

柔術右抱落投圖解

此の圖は相手の左脇の下へ右手を差入れ相手の左腕の自由を妨

げ我が左腕を圖の如くに高く相手の袖を摑むも宜腕にても場合に依り隨意とす。我が體は相手の腹部へ右脇腹を附けて左手は

右抱落投第一圖

相手の右の奥外袖を摑み相手を抱き上ぐる姿勢となり右腰を横に持ち上ぐると同時に左手を強く引き右手先に力を罩め次圖に移る。

右抱落投第二圖

乙者は左手を打て早く倒るべし手をはなさずば自身にあやまちをすると知れ

前圖の姿勢の如く三拍子揃へて我が左前へ投げ倒すなり投げたれば直に眞之位第二圖の構へを爲し殘心を爲すべし。

柔術左抱落第一圖解

左り抱落第一圖

我れより乙者を左に抱込腰を引て持上る圖なり

是れは前と反對にして我が左横腹を相手の腹部に附くると同時に左手を右脇の下へ差込んで腰の處を深く抱き込み右手をば逆に持ち兩足先に力を入れて少し腰を下げ直に腰を延ばしながら第二圖の姿勢になるなり。

此の右の手は寫生の時寫し誤りなり。

同第二圖解

此の形は兩足を寄せて腰を延ばして立ち上ると同時に相手を抱き込みたる處の圖なり。我が腰を左へ捻りながらに我が左後方へ投げ落すなり。相手は右手先を打ちて俯向に倒るゝなり。我は左足先に力を入れて左後へ開き殘心を附成相手が起き上り再び掛り來るを待つ構を爲すべし。此の第二圖は抱き上げたる處にて是より直に後へ投げるなり。講道館にては此の第二圖をは帶落と云ふ。

左り抱落第二圖

兩足踏揃て敵を左手にて抱込地を離れたる處の圖なり

同第二圖解

左り抱落し第三圖

抱込で既に左へ腰を延して落す處

同第三圖解

此の圖は横面より見たる様に寫生したるなり畫師が苦心の存する處を察せられよ。

柔術巻落圖解

巻落の圖

此の形も諸流にて能くする形なり

我が左手にて相手の右袖口を取りながら我が體にて相手を背負

ふ心持ちにて圖の如くに爲し右腕は相手の右腕に重ねて手首を持ち直に臀を持ち上ると同時に我が右肩口より相手を兩手を引くと同時に卷き込みながら我が頭を左斜に背負投同樣の心持にて前へ倒すれば相手も我が體に卷き込まれて倒るゝなり。此の形は講道舘にては外卷込と云ふ是も左右出來るものなれば其場合に應じて業を施すものと知るべし。

柔術卷込投圖解

此の卷込と云は前の卷落よりは實に美事に業が掛るなり只右手を相手の左肩口より首を卷込み左手は下より相手の右奥袖を取つて我が腰を相手の右下腹の處へ兩足を揃へて少しく腰を下げ圖の如き姿勢に至れば直に臀を跳ね上る同時に我が右肩より我前へ兩手と腰との三柏子にて投げるなり相手も左手を打つて仰向に倒るゝなり。

投げ終らば眞之位に爲る事は度々云ひたる如し。

巻込投圖

此れは敵の腕を持て身體を浮したる圖なり

柔術後腰圖解

後腰圖

此の手は倒る時強く頭を打事あり未熟の内は早く手を打て倒るべし

此の後腰と云ふは講道館にて附けたる名稱にして他流にては後捕と云ふ。雙方術を戰はし居る内隙を見て相手の背部に廻り直に背部より左脇の下に我が左手を差し入れ襟を取り右手は帶の前を摑み同時に相手を反身に爲し腰と兩足に力を入れて圖の如く敵を抱上げて直に左へ投ぐると見せて右隅へ投げ又は右へ投げると見せて左へ投げるなり直に俯向に倒る故に相手の上手なる時は投げらるゝも身體を地に付けず四肢に力を入れて四つ這ひになるなり。初心の内は投げられたれば右へなれば左手にて左へなれば右手にて疊を打ちて倒れるを宜しとす。

柔術移腰圖解

此の移腰と云ふは相手の右襟を左手にて取り右手は相手の後帶を取り抱き上げて我は反り身になり兩足先及下腹に力を入れて直に我が右足を約一尺餘斜に後方へ引くと同時に相手を我が右

移腰圖

此圖は乙者を抱上て既に投んとする處

脇へ投げるなり。圖は抱き上げて今正に投げんと爲す姿勢なり。相手も右手を以て疊を打ち仰向に倒るゝものなり。左横腹と我が右横腹の處を抱き合ふて居る我が體を右へ捻りながらに投るなり圖を能く見るべし。

柔術釣腰圖解

相手の身體を引附けて左手にて右袖口を取り右手にて相手の左腕の外部より背部の帯を取り又右足を持ち上ると同時に相手の身體を崩し下腹四肢に力を入れて相手を釣り上げ同時に入腰投の如き心持にて我が身體を左へ捻りながら倒るゝ勢にて相手を投げ倒すなり。

釣腰圖

敵を抱込で腰を持上て我が前へ倒すなり

柔術腰固圖解

此の圖は双方共相撲の姿勢の如くに成り居る處なり。

腰固圖

此の捕方は圖畫が面度なるゆへ次圖を略す

双方共左手は右袖口を取り相手の左脇帯を右手にて取り相手は

我の背部を摑み双方共に腰を下げて引締め居る内氣合を計りて

我は腰を延ばすと同時に右足先に力を罩めて右より左の方へ跳ね上る同時に腰を差入れて左へ倒すなり。斯の如き仕合は双方互角の取口なり。圖にては業の掛け工合解り兼ぬる點なきにしもあらざれば釣腰の如くにして業を掛くるも宜しとす、是れより種々變化あれど右足を外より跳るか又臥業に成るを宜しとす。

柔術肩車第一圖解

相手の左袖口を充分に引張り相手の身體が前へ蹌踉に乘じ尙強く引き右手に力を入れ右足を後方へ一歩引下げる同時に腰を跼めて圖の如く相手を引き込と同時に左手を相手の兩股の内より差入れて左太股を抱き込み第一圖の如く肩へ引き被ぎ兩爪先に力を入れ直に第二圖に移る。

肩車第一圖

敵を引込で腰を下げ直に又延し採の處

肩車第二圖

腰を延して右肩口より乙者を既に投る處

同第二圖解

下腹及兩爪先に力を罩め腰を延ばして被ぎ上げ右肩口より我が前に引落し投ぐるなり。

稽古中投ぐる時右手は相手の袖口を持ちて手を放すべからず相手も足を先に疊に附け手を打つて前に仰向に倒ると知るべし。

第二圖の被ぎたる手足の働きを能く見るべし。此の形は外見能く又掛り易き手なるが初心の内は可成相手の身體の我れより大なる者に掛けるは宜しからずと知るべし。

柔術隅返し臥業圖解

此の形は捨身業第二圖に似たる處あれども總じて臥業と云ふは柔術家には得意のものである臥業は手足の働きを自由に爲し離れ業が出來るものなり。

此の隅返と云ふは双方共定式法にて出で我より臂を疊に附けて相手の下に成り相手は是に附入りて押へ込まんと爲す故に我が

胸の處へ相手の頭を左手にて引附けて右足先に力を入れて相手の左內股の上の處を跳ね上げ左足は相手の右足元へ附けて右

隅返し臥業圖

此の業は眞捨身のくずれから是に至る事あり面白き形なり

手先に力を罩め相手の左脇の下の處へ押當て(エイ)と右手右足を押上げ左足は疊に附けて左手は充分に引き附け掛聲と共に我

が左隅の處へ投げるなり相手は仰向けに左手を打つて斜に左隅へ倒るゝなり。

柔術操隅返圖解

操り隅返圖

此の形は圖がよく出來てある參照すべし

此の操り隅返と云ふは相手が我を押し附け來る時態と仰向に倒れて左手にて相手の左襟際を取り右手にて左脇の下より差し入れて背部の稽古衣を摑み右足先の甲を相手の臍下に押當て左足裏にて相手の右内股に押當て圖の如くの姿勢に成りたる處にて直に我が右隅の處へ(エイ)と一聲三拍子揃へて返へすべし。相手は我體を越へ右手を押つて仰向に倒れるなり。

柔術達摩返圖解

此の形は右へ投ぐると見せて左へ倒すなり兩手にて相手を充分に我が胸の處へ抱き込み最初右向きに成る時左足先に力を入れて一寸倒すと見せて直に又左向きと成る時右向臑にて相手の左内股の處を強く跳ね上ぐると同時に我が左隅へ投げるなり。相手は倒れても手を解かぬ時は上より直に締めに掛かるを宜しとす。相手の腹部に馬乘に成り兩膝頭にて腹を押し附けるべし。

隅返と少の違ひなり。

達摩返圖

右足先が敵の左内股に掛て跳掛の圖

柔術引込返圖解

此の引込返も相手の右手を以て強く突張り來たる時我が兩腕で抱込みて後方へ下りながら臀より仰向に倒れて右足を相手の兩股の間に入れて左膝を立て爪先に力を入れて臺に爲し我が身體を右の方へ向と

引込返圖

此の足業に足を留て敵を倒すべし

同時に右足先に力を罩め高く跳ね上げ相手を仰向に倒して我は直に起上り眞之位第二圖の構へを爲して相手が再び掛り來るを待つなり。我亦直に締めに掛るも他の業を施すも可なり。臥業は手より足の働き肝要なり。

柔術横落圖解

是れは相手の右袖の外より腕を我が左手にて圖の如く卷き込み八ツ口を取りて右手は相手の左脇の下より背部を抱へて我が臀を疊に附けて倒るれば相手は上より押附け來ると同時に相手の右足を我が内股に入れ右足裏にて足首に押附けて圖の如く兩手先に力を込めて直に我が身體を左後方隅へ振向く心持にて我身を捨て其勢にて相手を投げるなり相手も左手にて疊を打て倒ること横捨身の如くなり。是れは講道館指南役故横山作次郎氏の得意の手なり。

横落圖

敵を抱込て左横へ落す處の圖

柔術横掛崩圖解

柔術横掛崩圖解

柔術横掛崩圖解

我が左手は相手の右袖外側の奥を取り右手は表襟を取り我は二三歩後方へ後ると同時に我右足を相手の右足の外に踏み止めて

横掛崩圖

本圖の如く直に左へ投る處

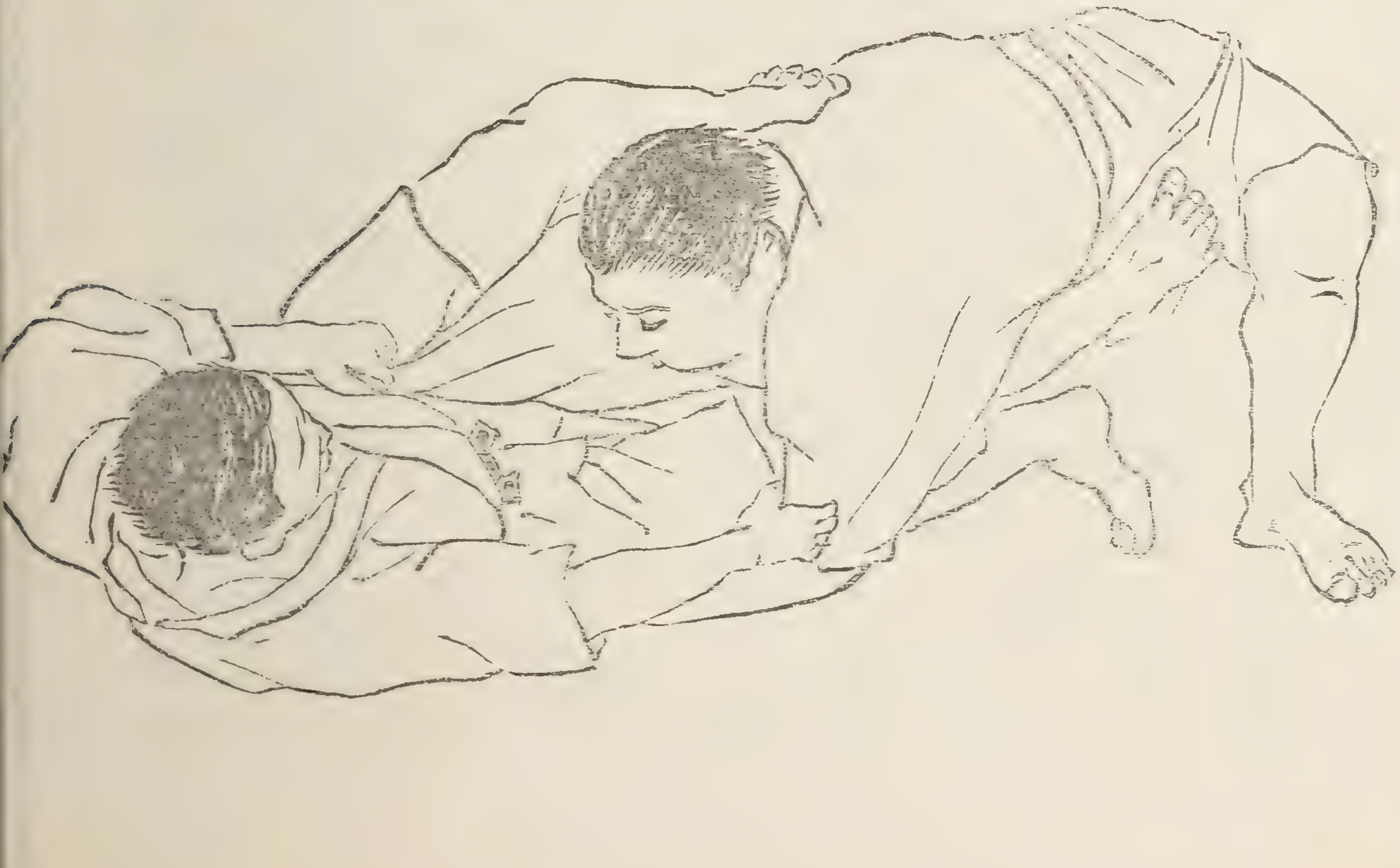
臂を疊に附け兩手先に力を罩めて左肩を左へ向ると同時に(エイ)と右膝を枕として我體を捨てながら左後方隅へ引落投ぐるなり相手も左手を打ちて仰向に倒るゝなり。此の形は講道館にては横分と云ふ。此は兩手を強く引くと同時に横捨身を掛くる心持にて業を施すものと知るべし。

柔術跳越圖解

此業は入り亂れて戰ひたる後の臥勝負になり。我が兩手にて相手の兩袖口の外部を摑みて我は仰向に臥し兩足にて相手の左股に押當て左足は右脇の下へ掛け相手が我が腰帶を引締めて袖を取らんと爲したる時兩手兩足先に力を罩め相手の左足の膝を立て居るを(エイ)と一聲投ぐるなり我が身體の上にて廻轉し頭部前方へ投げたる形は眞捨身にて投げられたると同じ様になるなり、此の業は兩手は強く引き兩足は跳ね上る心持が肝要なり。

跳越圖

引込て既に頭上を越して向へ投る處の圖



柔術固業の解説

總じて固業に成ると初心の内は成るべく他人の稽古を見學して我が業の上達してより行ふを宜しとす。

此の業は相手を組伏せて起上られぬ様に防ぎ又は我を押へ込みたる上の者を跳ね除ける術なり。

今迄の立業は相手の力を利用して投ぐるものなるが故に業も掛け易かりしが此の固業又は締込關節業は我が實際の腕前を現はさゞれば出來難し卷末に蘇生活法圖解もあれど此の以後の業は上手の者に就いて充分稽古を受くるが肝要なり。近來山師的の者が大々的新聞廣告を以て斯道に志す地方の人士を僞り無法の金圓を貪り取り爲に購求者間に不平の聲高しと聞きたり。本書の如きは武士道鼓吹の目的を以て廣く天下の有志者に便利を與へんが爲め格外の安價を以て紹介せるなり。讀者諸君著者の微意を諒せられよ。

柔術連固投の圖解

是は相手の右腕を外部より抱き込みて相手の紋所を右手に掴み左手を以て左肩口よりして右襟際を取り我は左足を後へ開くと同時に(エイ)と一聲兩手は襟を絞めたるまゝ投るなり相手は四ツ

連固投の圖

甲者が絞りたる時乙者は早く負を示すべし

這に倒れるなり揚心流にも此形あり。

柔術襟四方固圖解

此の形は我が右手先にて相手の左肩口より襟を摑み左手は相手の左脇下より右襟を取り兩股にて相手の頭を挾みて兩臂を疊に附けて起さぬ樣に爲すべし我が頭にて相手の臍の處に押當て一寸横向に成りて腕を締めるなり。

襟四方固圖

相手も前の如く兩足先に力を入れ臂より起き上る事を心掛るなり。起き能はざる時は負を示すべし。下に成りたる時は兩手先を以て倦くまでも起き上る樣に心掛べし。
此形は種々に崩れる事あり故に講道館にては崩上四方固と稱す。

柔術腰四方固圖解

腰四方固圖

是は兩膝を曲げて太股の處にて相手の頭を挾み兩脇の下より兩手にて相手の兩腰帶を取り我が下腹の處を相手の顏に押し當て兩腕を引締め兩股にて首を挾みて固めるなり。相手は眞向き成るも顏は左右の何れにか向け居るを宜しとす。我れも又相手が右に起き上らんと爲したる時は右の方へ力を入れ又左に起き上らんと爲したる時は左へ力を入れて防ぐべし。相手も起ること能はざる時は直に負を示すべし。

柔術横四方固圖解

此の固方は相手の右側に在りて右手にて相手の内股より差入れて帶を取り左手は相手の右脇の下より首筋の襟を取り我が胸部を相手の腹部へ押當て兩膝を開きて引き締め固む相手が起き上らんと爲す時は力を罩めて起さぬ樣に防ぐなり。又押へ込まれたる者は此れに反して左手を延ばして上の者の左肩口より帶を

取り右手を添へて起上る事を勉むべし試合等に際し行事ある時は何分間とか時間を限り其の間に起き得ざる時は負となるなり。

横四方固圖

柔術袈裟固圖解

此の固方は圖の如く我は相手の腹部へ右脇より掛かり左手にて相手の右腕を巻き込み右手は相手の左肩口より背部の紋所を摑みて相手の自由を妨げ兩足は少し跼めて充分に相手の腹部へ右

袈裟固圖

脇腹を押附けて固めるなり。

相手は例の通り臀より兩足に力を入れ兩手にて上の者を倒して起き上らんと勉むるが臥勝負の肝要なる處なり。

臥勝負は狹隘なる場所にては爲すべからず他に稽古する所無き時は充分注意して稽古すべし。

柔術抱き返し圖解

此の抱き返しと云ふは押へ込の崩にて起き上り又捨身等の崩れたる時に相手の脇の處へ摺り寄り相手の左腰の處へ密着して右手にて背部より抱き込み手先にて相手の上襟を取り左手を添へて左足を相手の左脇の處へ踏み込み右足を後へ引と同時に我れより仰向に捨身となりて相手を我が右後隅へ投げるなり。相手も右手を打ちて倒るゝなり。此の如くなる時は後捕裸捕等を爲すも差支なし。講道館にては抱分と稱す。

抱返圖

此の抱返しは敵が負を打ぬ時は本文の如くにすべし

柔術抱き返し圖解

柔術喉頭固圖解

是は俯向に倒れたる時直に背部へ押し掛りて我が右腕を相手の

喉頭固圖

右肩口より喉に圖の如く掛けて左手は相手の左腕下より左肩脇へ差し入て兩手先を組み我は右脇腹の處にて押し附け右腕を締めて右膝を曲げ左膝を立ち足先に力を入れて相手の起き上るを防ぐべし。相手は四肢の先に力を入れて起き上ることに勉むべし。我は咽喉を右腕にて締め相手が左り手に力を入たる時には我が左り手を持ち上げると相手は自由を妨げらるるなり。此の押へ込は種類多くあれども大略は記載せし故此位にて擱筆す他は諸君の腕次第なり。

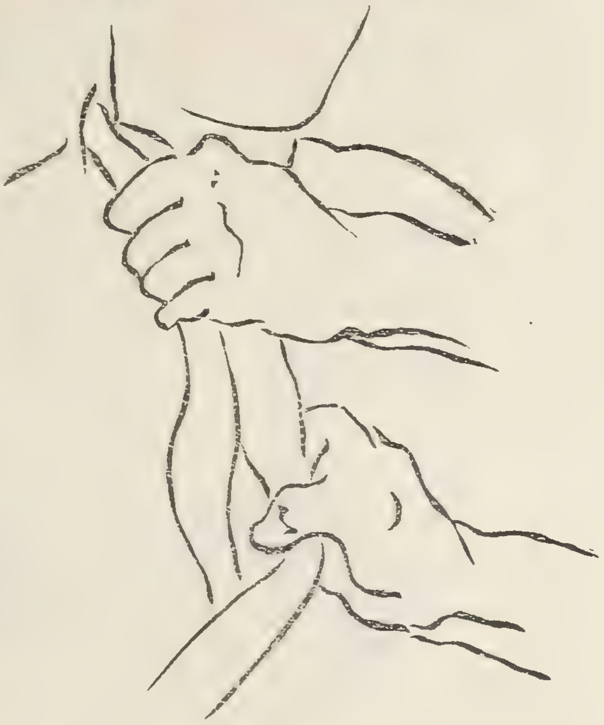
柔術締込逆手の説明

凡そ柔術極意秘傳に近き締業逆業の類は場合に依り締落(假死)し逆手にて怪我を爲すこともあれば殺活法を能く心得て術を行ふべきなり。敎師又は先輩の者と稽古を爲すべし。

柔術左片胸捕締圖解

左片胸捕と云ふは我が兩手を相手の上下襟を合せて咽喉際にて握り圖の如くに爲して我が拇指と小指に力を入れて右手にて上襟を下へと引締るものなり此時相手は兩手先に力を入れて兩臂を張り我が握り居る右襟を摑み同樣に開く時は解るものなり。我は左を解かれたれば直に右に替へ前に同じ形にて業を行ふなり。

左片胸締の圖



柔術右片胸捕締圖解

右片胸捕は最初前と同じ相手の襟をば搔合せて右手にて握り小指より拇指に力を罩めて圖の如くに爲し左手を添へて下へジリ

右片胸締の圖

ジリも引き締るなり。相手も是を解くには前と同じく左右の手先にて摑まれたる襟を持ち臂を張り開くなり圖の如く直に解けるものと知るべし。左右捕方の圖を能く見るべし。

柔術逆業の解説

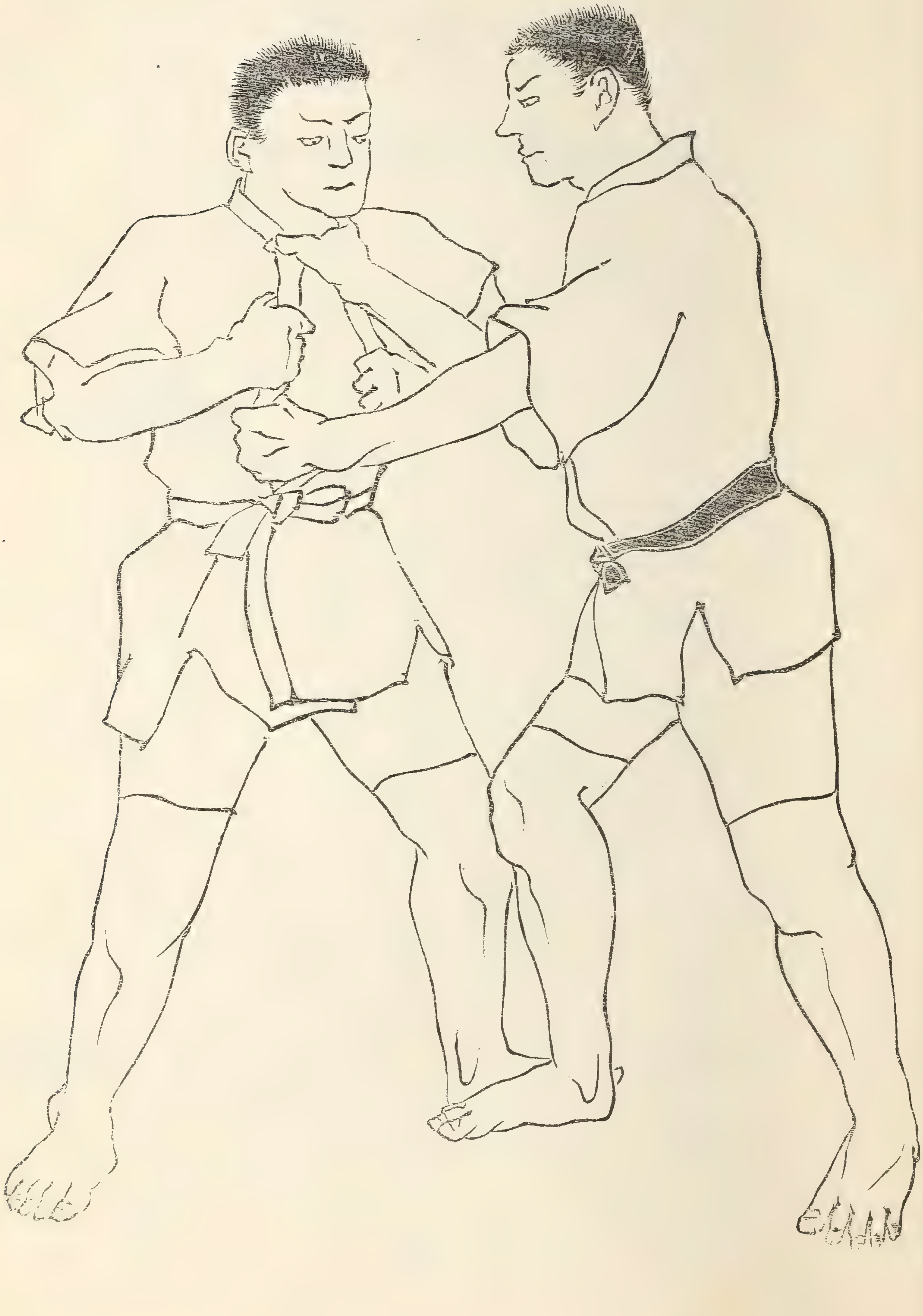
逆業と云ふは固業よりも危険なる故に能く熟達の上にて己より先輩の者と稽古すべし。講道館に於ても投業を専門とし次に固業迄位を教へ逆手は教へぬ事に成りありと聞けり。故に試合等には逆手は用ゐざるを宜しとす。唯無法者等を捕り押へる等都て護身の時には心を靜にして充分術を施すべし。

柔術片胸解き圖解

是は我が胸を搔き合はして摑まれたる時相手の眼を白眼ながら總身に力を罩め兩手にて相手が握り居る手の下を我が兩手先にて我が胸を片方づゝ取り心靜に腰を下ぐると身體は一寸斜めになり同時に臂を張りて開くべし速に解けるものと知るべし締める方は右手が先の時は右足を一歩前に踏み出し又左手が上になる時は左足を一歩前へ踏み出すなり。

片胸解き圖

解きかけ掛りたる處の圖



柔術突込圖解

突込圖

突込のつき時は早く負を打べし

此の突込と云ふは他にもあれど今は臥勝負の場合を說くべし。是は相手の體に馬乘りに成つて相手の表襟隅を右手にて取り左手にて圖の如く下襟の五六寸下の處を取り兩膝頭を疊に附けて相手の右咽喉へ右手に持ちたる襟を突き込み左手を我が方へ強く引き附くるなり。相手は我の襟を右手にて摑み左手にて右襟下を取り腰を持ち上げると同時に下より左へ引き倒して跳ね起るなり我は相手の自由を妨げながらに襟隅へ突込みて咽喉を締めるなり。相手も起上る事能はざる時は負を示して終るなり。

柔術右腕挫圖解

此の形は諸流何れの派にもある形にて相手より右手を以て我が胸襟を取りたる時其握りたる手首を右掌にて押へて腰を引くと同時に相手の腕を逆に反らして直に我左腕を圖の如く相手の二

右腕挫圖

此の圖は既に挫くの處なり

の腕の上より巻き込み其手先にて我が下襟を持ち右手へ持ち直して構へるなり。斯して直に腰を下げ總身に力を罩め腕にて下へ押附る時は相手は耐へ兼て負を示すなり。

柔術左腕挫圖解

是れは前のと同じなれど左にて行ふものと知るべし。
我が二の腕を相手の二の腕の上に當て臂を下げる時は相手は我が思の儘になるなり。我が體を大きく後方へ引き下り右膝を突き左足を立て手首の甲を我が掌にて握り内へ折込み右二の腕は押附け下腹に力を入て圖の如く固める時は如何なる强敵も身動きも出來ぬものなり。
相手は負を示して終るなり。

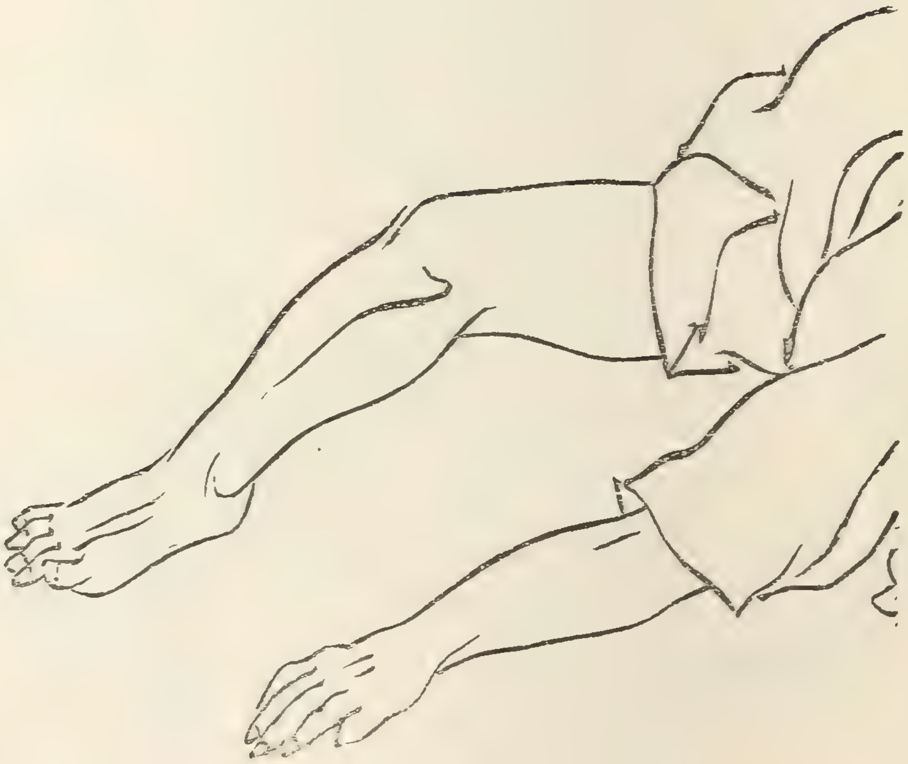
左腕挫臥勝負圖

是は手先に力を込て絞る處なり

固方を能く圖を參照すべし

柔術腕挫圖解

我が左手にて相手の右腕を取ると同時に右手を添へ兩足は相手の咽喉の處へ圖の如くに押附け成るべく肩の方へ寄る心持にて兩手を引附けると同時に總身に力を入れて反り身になるなり相



腕挫圖

此の圖は能く寫生が出來てあるゝ参照すべし

同第二圖解

手は早く疊を打ちて負を示すべし。圖の如く相手の腕が逆になる故一時の力を入れて反る時は相手の腕が折れる事あり注意を要す。

同第二圖解

腕挫第二圖

此の形の腕挫は業の違ひだけに種類あり

同第二圖解

此圖は臀より起き上りたる處なり。相手の足首を左手にて取り挫がれたる右腕は捻り返して逆を直し足先に力を罩めて臀より起き上るなり。

此も双方共無理をなする故痛處に氣を附て注意する事肝要なり。

柔術小手緘圖解

是れも臥勝負にて入り亂れたる時に相手は下より業を掛ける心組の處を我れ先に相手の右手首を右手にて握り左腕を相手の右腕下へ差込で圖の如く我が腕を掌にて握り相手の左脇腹より上に乘り掛り相手を起さぬ樣にして腰に力を入れて左手先にて我が手首を持ちたるまゝ兩方共に下へ押し附るなり。相手も此業に掛りたる時は無理をせず早く負を示すべし。是を返すには相手の腰帶を左手にて持ち左足先及腰に力を入れて跳ね起きれば解ける事あり。講道館にては腕緘と云ふ。立勝負にも此形あり

小手緘圖

圖を能く參照すべし

柔術膝固圖解

双方臥勝負に成りたる時我相手の右側に在りて相手の仰向に臥して居る襟元を兩手に摑み右膝頭をば相手の水月に押當て左膝

膝固圖

此の圖の如くに固める時は大概ぬけられる者としれ

を立て四肢に力を入れ引締る時は相手は耐へ得ずして負を示すべし又圖の如く我が左足は相手の頭の先へ爪先が出る位が能く利くなり。膝頭は押附けて固め兩腕は總身に氣を罩めると同時に引締る事を肝要とす。相手も是れを返すには左掌を以て左より右へ押拂ひ除けると共に足先に力を入れて跳起きるなり。

柔術胴締圖解

押へ込みたる相手を下より締めて勝を取るは此の胴締に限ると知るべし。圖の如く相手は充分我が兩襟を取りて咽喉を締るなり我は兩足を開き兩手にて相手の襟を取り胸の處へ引附ながら咽喉を締ると同時に相手の兩脇腰を兩足にて挾み腰を延ばずと同時に胴を締めるなり。

一時に急に締る時は骨を折る事あり注意すべし、

是れを返すには下腹に充分に氣を罩め相手の片足を解けば逃れ

得るなり。足絨又は絞り足とも云ふ。

胴締圖

此の形は圖を能く參照すべし

柔術足緘圖解

足緘圖

込入て圖にしめしがなきゆへ
第一圖にて略す

此の足緘と云ふは下より業を爲すものにて我は仰向に成ると相手は是れに附入りて襟締等を試みんと左足を我が左脇へ突きた

る時我は右足を以て相手の股の上より廻して左足の草靡の所に當て左足先を添へて相手の左足を固めると同時に右手にて體を我が胸へ引附け左手にて相手の右二の腕を卷き込みて締るなり。

是は足の閂とも云ふ次第なり。

柔術足挫圖解

此の臥勝負は相手は仰向に倒れ居て足先を以て我に掬ひ拂足等

足挫圖

此の圖は能く參照すべし

を掛け來る時我は直に相手の右足首を右腕にて抱き込み左掌を向臑の處へ當て右手先を我が左手首の處へ當て圖の如く下腹に力を入れて相手の足首を逆に成る樣に兩手先にて固める時は相

手は起上り得ず負を示すなり。

柔術締絞業解説

此の締絞業は固業よりも危険にて締めて居る内に相手がいつか呼吸が止り居ることあり故に人工呼吸術又は活法にて蘇生せしむるなり。

上達してより締業を用ふるは自由なれども初心の者は教師及先輩の者の同席無き時は逆手締業は掛けざる様心得べし。昔の柔術界にては逆締等最も流行せしも現今は一般に投業を専門とする傾向なれども流儀に依りて締逆を専門に教へる所もあるなり他流と組討をする時は先づ逆又締業を以て施す是を受る心得が無くては如何と思ひ著す者と知るべし。

柔術十字絞圖解

十字絞圖

此の寫生本文にて知るべし今既に首を
さげて指先より充分に手が掛りたるゆ
ゑ締にかかる處を見せたる者なり

是は相手が仰向に倒れたる腹の上に馬乘りになり。兩膝頭を疊に附けて兩足先を爪立て臀を相手の臍に押當右手にて左肩の襟を握り左手は右肩襟の處を同じく小指より順次に力を入れて摑み咽喉に我が顏を少しく横に向けて兩肘を張り總身に力を込めて十文字に締る時は必ず相手は締められて假死するなり。是れを外し逃るゝには相手が兩肘を疊に附けて締附る迄に下より兩掌を以て相手の兩臂頭を押上ぐと同時に下腹及兩足先に力を罩めて跳ね除けるなり。

襟を深く取りたる時は腕先にても締めらるゝも淺く取りし時は兩臂を疊に附くるまでに絞るべし。

柔術雙十字絞圖解

上なる者は兩膝を突き居る時は横に倒され易き故圖の如く左片足先に力を入れて立膝を爲すなり。此の圖は下の方が充分に手

が取りあれば下の方の者に勝ある様に見ゆるも上の者が七分の徳あり上の者は下より締られ又は跳飛されぬ様するなり。上に

双絞り圖

互角の者の組打にて勝負は下成る者が上手なる時は必ず臥勝負の上手には氣を附るべし

ても下にても充分に締めたる時は樂なる方へ顔を横に向けて居るべし。

柔術綾絞締圖解

綾絡締圖

乙者は右手にて甲者の襟首を摑我が前に投ぐるも甲者兩手を解ずば仕方なく負を早く示すべし

我は相手の背に廻り右手にて相手の左襟元を取り左手は左脇下へ差入れて相手の右肩口の稽古衣を摑みて左膝を疊に突て足の爪先を立て居るなり。右足は立膝を爲して頭をば相手の左肩へ押附けて兩臂を張り總身に力を罩めて締るなり。此の手に掛りたる時は逃るゝ術なければ速に負を示すべし。

柔術右後絡圖解

我れ相手の背部に廻り右腕にて相手の右胸を外より巻き込み手先にて稽古衣の紋所を逆に摑み左手は可成相手の左脇の下へ寄り右肩口の襟を取るべし。然して左足を大きく後方へ引いて膝を突くと自然に相手の體が崩れて後方へ倒るゝなり。其時に右膝を立て下腹に力を罩めて兩手先を以て締るなり。乙者は前と同じ。

右後絡圖

本文の如くにて充分に圖を參考すべし

柔術左後絡圖解

是も前と同様なれども左右の違ひだけなり。

左後絡圖

挿畫の如く締る處の構へより
一歩後へ下るとよく締るべし

我が左腕を相手の左脇の下より差入れて直に襟首なり又は紋所

の處を早く取り右手を以て左肩の襟元を取り圖の如くし直に左足を大きく後へ引きて膝を突き立て足先を爪立て右膝を立て同時に兩手先にて締るなり。

前圖及此圖は讀者の解し易き爲に肩口より寫生したり。

柔術裸體捕圖解

此の裸體捕と云ふは手數種々あれども今は其の一を說くべし。

他は之を應用したるなり理は同じと知るべし。

我は相手の背部に廻り直に右腕を右肩口より咽喉に掛け左腕を左肩へ掛け掌を以て相手の後頭部を押へ右掌にて我が二の腕を握りて相手の身體を我が胸の處へ引附ると同時に腰は其儘にて大きく左右足を後方へ引き下ると共に左掌を向へ押附ければ相手は此れを解く術なく咽喉を締め附けられ早く負を示すべし。

左右とも能く利く捕方なれば勝手宜き方を早く掛るべし。

裸體捕圖

此の掛口の圖を能く參照すべし

是は稽古衣ぬげて裸體になる時の形なり又眞揚流に裸身捕と云三種の形にもあり。

是れは如何しても解く事のできん形なるゆへためして見るべし。

亂捕の形は此位にして置又教師用には成丈明細に記べし。

柔術當身の解説

柔術を學びて初傳目祿、免許皆傳を許されたる者は皆殺活の法を知得せるなり。　當身と云ふは唯圖を見或は假初に聞きし斗りにて猥に他人に此法を行ふも其効なきものなり故に師範より此者は初段の業有者に誘の活を許すとか五級の腕前ある故に何々の活法を許すと云ふ樣に襟活法、陰袋活法を許し段級の進むに隨而目祿免許と順を追ふて術の奥儀を習得するなり。　されば僅か柔道の初手を學びて最早一人前の柔術家に成りたると思ひ猥りに術を濫用し他人に迷惑を掛るは甚だ心得違ひの極めなり。

本書は全部參考として能く敎へ能く戒めたり。此の書を常に讀み學びて其長を取り其の短を補ひて新に工風して天晴天下の名人となる樣心掛くべし。

義　　爲

習ひたる業をみだりにあらはすな
おのがいのちの瀬戸際にせよ

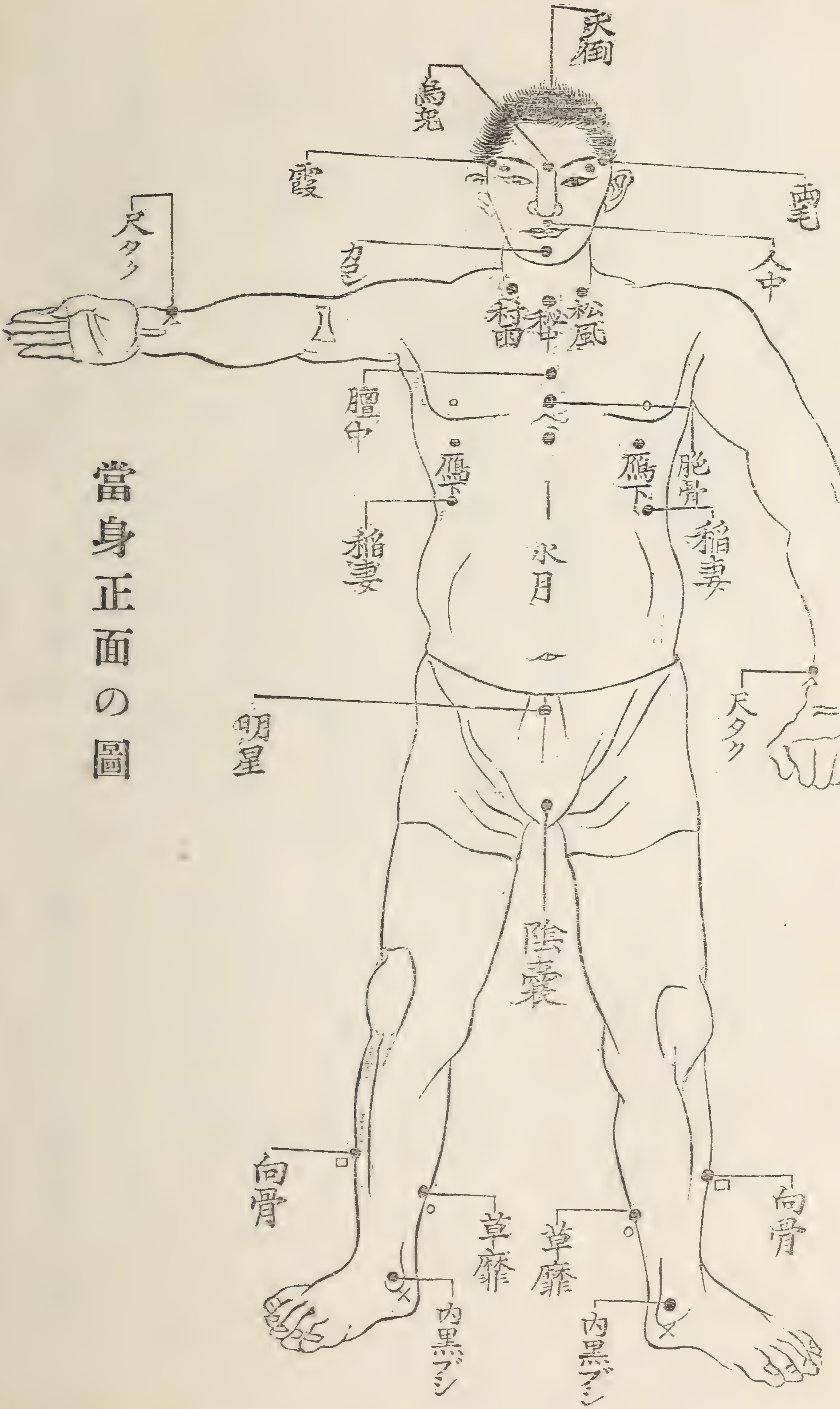
同　　人

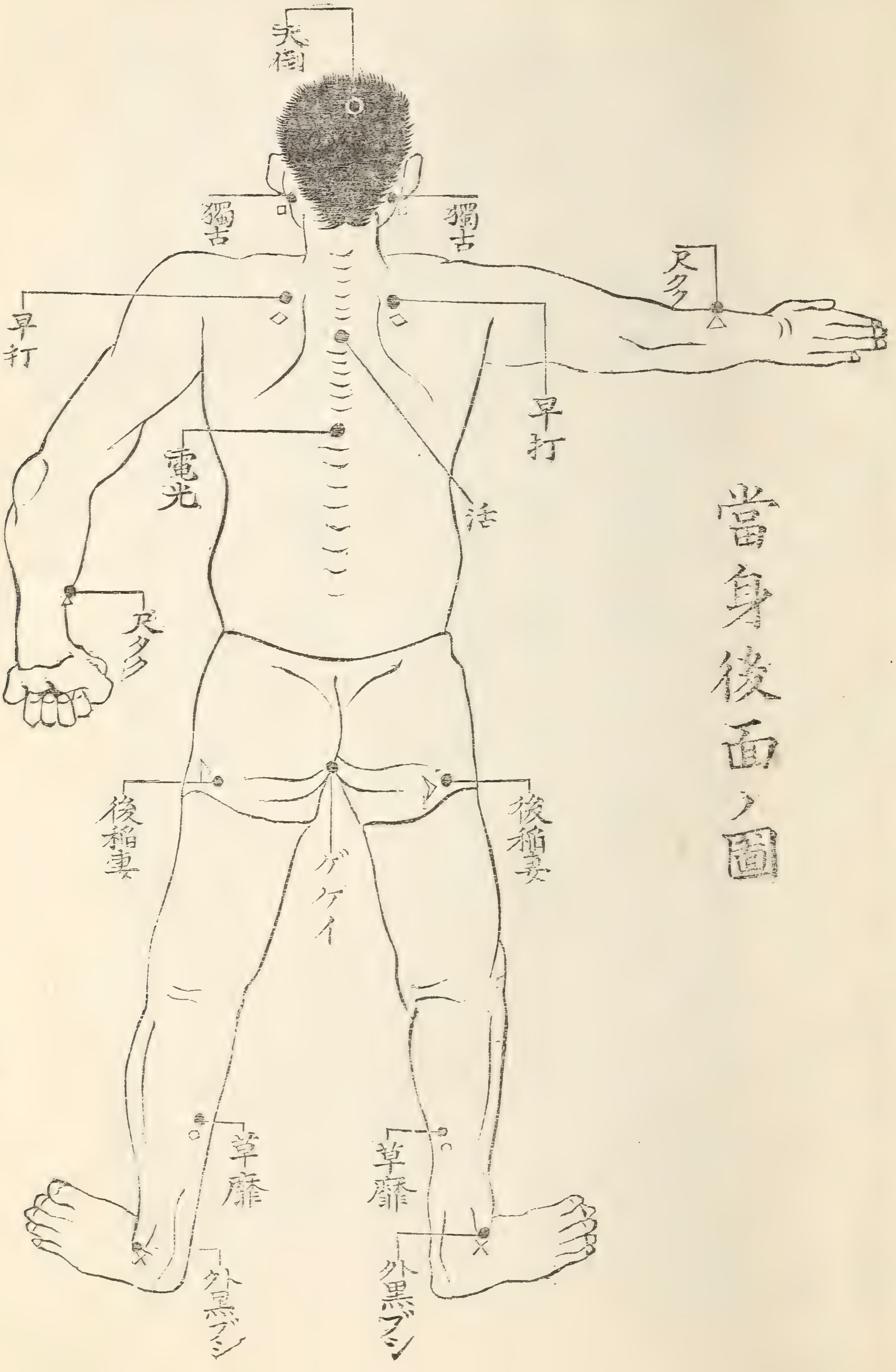
國の爲め己がためなり身を護る
ほかに無益の腕立てをすな

眞揚流　古歌

我が上に立つ藝術を苦にやむな
すきの道こそ上手なるべし

當身正面の圖


天倒
烏兎
霞
人中
天タク
村雨
秘中
松風
膻中
雁下
雁下
稲妻
稲妻
水月
天タク
明星
陰嚢
向骨
向骨
草靡
草靡
内黒ブシ
内黒ブシ



當身後面ノ圖

柔術當身圖解

此の當所及其名稱を常に能く暗誦して同志の友との談話中にも必ず定めある此の名稱を用る事を怠るべからず。

正面の部圖解說

天倒、烏兎、霞、兩毛、人中、カツコン、秘中、村雨、松風、膻中、脆骨、鴈下、稻妻、水月、明星、陰嚢、向骨、内踝、草靡等にて兩腕先は尺タクと云ふ又松風の處を流派にて風月と云事もあり。

後面の部圖解說

天道、獨古、早打、活、電光、後稻妻、ゲケイ、草靡、外踝、尺タク等なり。以上の當所にて死活を自由に爲すは柔術家の秘法なり常に當所を覺へ居りて萬一の時に施すものと知るべし。以下順を追ふて解說

すべし委しくは後日教師用として出版す。

天倒

天倒及天道とは前頭骨の部を云ふ天道は頭の項上にて天倒は小兒の俗に踊子と云ふて頭腦へ脈を打つ所を云ふ。
天道を強く打つ時は頭の三大骨が開きて絶命す。蘇生の術無し。
天倒を打ちて卒倒したる時は呼吸術又は誘の活にて蘇生す。心臟に達する大切なる急所なり。

烏兎

烏兎は顏の中心兩眼の間鼻の上部の處を云ふ。是を當てる時は眼眩て卒倒す。此の所より一寸位離れし處を打つても鼻血を出すほどの大事の急所なり。

人中

人中は鼻と上唇の間の眞中を云ふ極めて大事にて強く打ち當る時は呼吸術又は活法にては戻り難し顔面動脈、神經鼻骨、上顎骨、三叉神經、神機紛擾、呼吸妨害、神經戟衡等の原因に依るなり是大事の殺なり必ず愼べし。

カッコン

カッコンと云ふは腮の上と唇の下の處を云ふ此の當も人中と同一にして蘇生の術を施すも其効無し原因は前と同樣なり。

霞

霞と云ふは顳顬骨俗に米噛と云ふ處なり是に當る時は腦髓反劇諸神經攪亂の原因にて卒倒するなり。

兩毛

兩毛の當は前の霞の當と共に形に能く用ふるなり。此の當は兩眼尻の所にて霞より一寸下の處なり。此の處を當る時は前と同樣にて卒倒するなり。

獨古

獨古は兩耳の後の處なり。是も形の時に多く用ふるなり耳朶の裏の處ない此處を當るときは耳筋の起點と後腮の間を強壓する原因にて血管及神經を壓迫すればなり。

秘中

此の秘中と云ふは形に於ても亂捕にても固締業にも能く用ふる第一の殺處なり咽喉の眞中胸骨部の上なり氣管を壓し呼吸器を

害し隨而肺臟等に其の累を及ぼす故卒倒するなり。

松風村雨

松風(風月と云ふ流派あり)村雨の當は肩胛舌骨筋の左右の處圖を見べし右を松風と云ひ左を村雨と云ふ是大事の殺なり。

膻中

膻中と云ふは俗に水落と云ふ處なり此の當は胸部胸骨の眞中にて是を當る時は神經震盪、血行遽變、呼吸氣絶に依り卒倒す然れども誘活、心臟活、裏活、襟活にて蘇生するなり。

鴈下

鴈下と云ふは兩乳の下一寸餘四方を當るなり氣絶の原因及活法は前と同樣なり。

稻妻

稻妻と云ふは浮肋骨部左右を云ふ俗に肋の三枚目と云ふ處なり氣絶の原因及活法は膻中と同樣なり。

水月

水月は胃腑胸下端心窩の眞下を撃つなり神脈を刺戟するより反腦神經衡脈の三原因にて氣絶卒倒す活法は人工呼吸術にて蘇生す是れにて蘇生せざれば裏活又は誘活にて復活するなり。

明星

明星と云ふは臍の下一寸餘四方の處を突當蹴なり大腸小腸及膀胱の二腑を劇格して絶息するなり襟活、陰嚢活、裏活、人工呼吸術にて蘇生す。

陰囊

陰囊の當は俗に云ふ睪丸を蹴り或は突き爲めに膀胱直腸、睪丸交感神經精糸動脈等に害を受け絕息す陰囊活を施すべし睪丸環が腹内に入るあり大事に圍むべし。

向骨

向骨を當る時は唯總身に痛を感ずるだけにて絕命することなし萬一氣絕したる時は誘の活法を施せば蘇生す

草靡

草靡の當と云ふは俗に土不踏と云ふ處と圖にある如く「フクラツバギ」をも草靡と稱す處を當てるなり是を當てる時は全身に痛みを感じて倒るゝなり。

內外課

此の課と云ふは向骨と同事にて頭腦へ迄も痛を感じ絕命せざれども萬一氣絕したる時は誘活を施すべし。

早打

早打と云ふは針醫が肩の强く凝りたる時早打と云ひて針を打ち往々死に至らす事あり其時は胸中を摩り誘活襟活を施せば効あり之に當るときは腦髓肺及肋骨等に害を及ぼし絕息するなり猥りに針を打すべからず大事なり。

活

此の活と云ふは背骨第一骨より六七番の間の男子は左寄り女子は右へ寄りし處なり。此の活法は惣活法十三活の內一番多く用

ふる活なり。

電光

電光と云ふは(一)背の第三推を當てる時は肺臓に感ず(二)背の第五推を當てるときは心臓に感じ(三)背の第六推に當る時は背髄中樞の激動に由て卒倒するなり。

後稲妻

後稲妻と云ふは圖の如き處にて是を當る時身體痛みを感し倒るるなり。此處へ陰嚢活法を施すなり活法の部に委しく説くべし。

下閨

下閨と云ふは肛門の處なり是れに關する説明は最も柔術家に必用に付巻中活法の部にて詳細に説明すべし。

尺澤

尺澤と云ふは形に於て活用する處多し。撓腕長伸筋と總指伸筋の間を壓するなり。斯くすれば神經を刺戟し痛に耐へずして卒倒す。撓骨神經、尺澤神經、筋膜に痛を感ずるものと知るべし

柔術活法の心得

凡そ呼吸術を活用爲さんと欲する時は第一に心を靜にし形を稽古すると同樣の態度にて事に當るべし。

道場に於て稽古中假死したる者は勿論絞首溺死高所より落下したる者及馬電車より落ちて人事不省となり又は產前產後血の爲めに假死したる者等は總て此の活法にて蘇生するもなり。活法を施すに當りて精神知覺運動の三機は勿論呼吸血行體溫等を能く調べて掛るべし。

假死者は全身冷へ氷の如くなり居るも脇の下に少し溫度ある時は必ず蘇生するものなり。人體には八結と云ふて八つの穴あり即ち兩眼耳鼻口肛門を云ふなり。今此に人工呼吸術を詳細に説明すべし。

人工呼吸術第一圖其の一

乙者は(ヤー)と手を縮める處なり

甲者は臍の下より兩乳下迄
で摩り上りたる處
掌の●點の處にて摩るべし

此の法は近來各醫家柔術家及警視廳に於ても實施しつゝあり。醫師の來る迄間に合ざる時此の呼吸術を以て蘇生せしむるなり故に素人にも解し易き様挿畫を以て説明すべし。

前にも述べた

る如く死者の身體冷却すれば全身堅くなるもの故甲者は假死者の胸を兩手摩擦し全身の骨を次第に柔かになして乙者が頭部へ廻り兩手首を持ちて我が兩股の處へ假死者の頭を圖の如く爲し甲者は假死者を仰向に寢かせ全身を能く摩擦し柔はめる事を第

人工呼吸術第一圖其の二

乙者は（ヤー）と兩手先を引延したる處

甲者は(イヌ)と両胸下より臍下迄
摩り下する處

一とす。急死は必ず骨が堅き故關節骨を折りては施術者の不覺

なれば能く心得て術を施すべきなり。

死者兩股の處へ勝がり甲乙者共に兩膝を突き爪先を立て甲者より乙者とかはり〴〵氣合を掛けるなり即ち甲者がエイと掛聲を發しながら兩手にて挿畫の如く兩乳下より臍下迄を摩り下すなり乙者は甲者がエイと聲を發して摩擦したる其手を縮めたる時(ヤー)と答の聲を合せて數回爲す内必ず蘇生の氣味が見ゆる故其時は氷水なり其他氣附の藥を口に入れ冷水を顔に吹き掛けるべし素人の蘇生法は此れに限るなり。氣の附きたる時は靜に床を取り寢かすべし其時に鼾をかきて長時間寢るものと知るべし。稽古中假死したる時は五六分乃至十分間位にて蘇生するなり氣が附きたるときは拳を以て死者の背部活所を一つ強く打つべし。又絞首は二十分位の間を經過して蘇生術を施したる時は必ず前に述べたる如く廿四時間位は鼾をかきて寢て居る故一二時間毎に度々名を呼びて起すべし。

食物は牛乳を熱くして與ふべし地方にて牛乳無き所なれば薄き粥を與ふべし。施術者は精神を死者の身體に集中すること即ち熱心事に當るが肝要なり。

人工呼吸術

人工呼吸術を以て蘇生爲さしむるには輕き假死者は前の如くにて容易に蘇生すれども重き首絞り等は術者が充分に氣合を罩めて假死者の指を延ばして甲乙兩者共に仰向に臥して圖の如く兩手首と兩足を持ちて双方聲を揃へて(エイ)と云ふ時には兩手足とも縮める事(ヤー)と云ふ時には又引延ばし死者の顏を見ながら斯くすること數回行ふべし頭の方に廻りし者は死者の頭を兩股に挾みて耳に觸れぬ樣に挾み圖の如く兩膝を突き兩爪先を立て全身に氣と力を罩めて術を施すべし。又乙者は足の方に廻り是亦甲者

人工呼吸術第二圖其の一

乙者は(ヤー)と兩足を縞たる處なり

甲者は（エイ）と兩手を縮めたる處

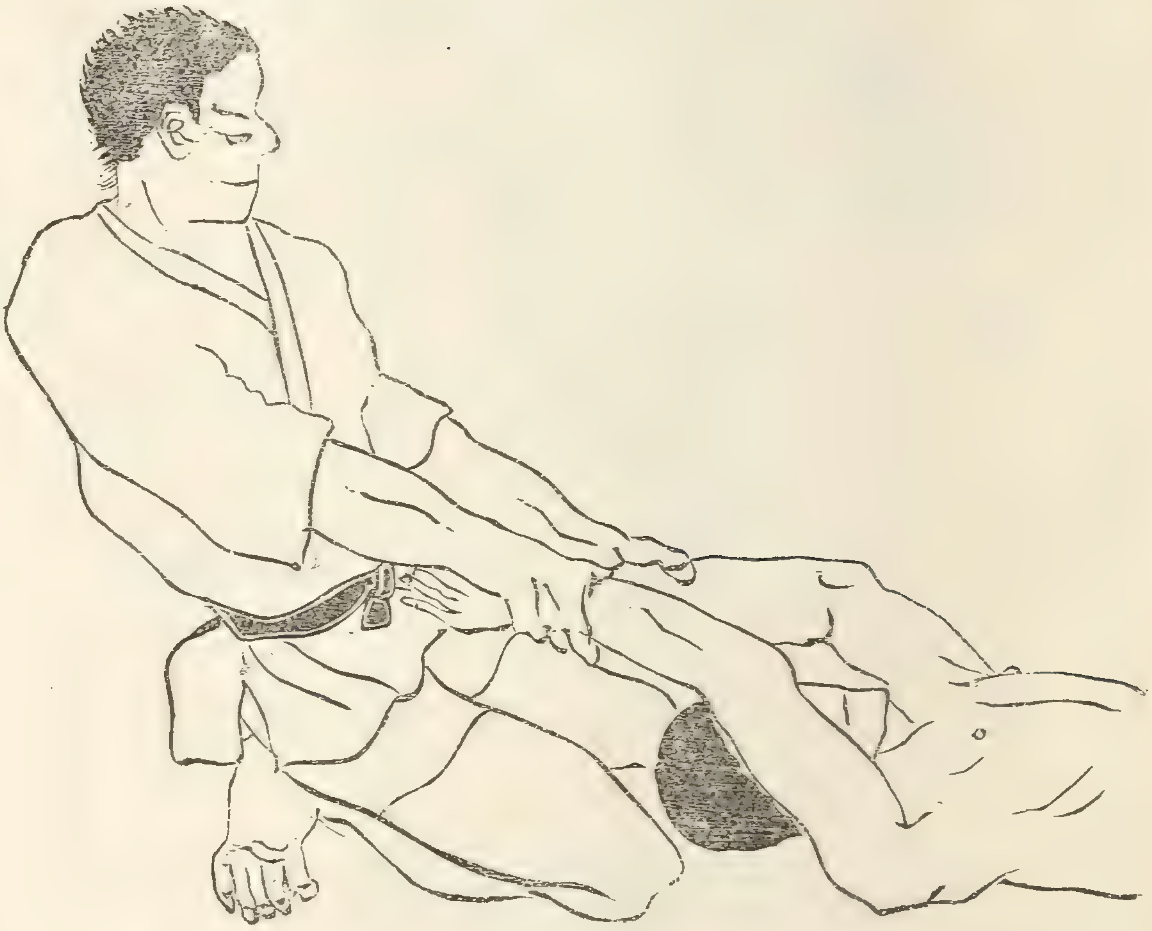
と同様の心得にて掛るべし。輕き假死者と云へ共氣と力の罩らぬ時は術を幾度施すも其効なし。絞首其他の變死者を見て驚き術を施すに當り周章るべからず斯る時は術者水を呑みて心を落附て然る後術を施すべし。又蘇生すべき者も術者の不注意にて

復活せざる事あり。活法呼吸術は十中八九迄は必ず蘇生するなれば充分注意して掛ることを心掛べし。然しながら永く病氣し

人工呼吸術第二圖其の二

乙者は(ヤー)と両足を引のばしたる處なり

甲者は（イ）と兩手を引延したる處



たる者及病中にて絞首其他の事變にて假死したる者は活法にても蘇生し難し。

呼吸術の秘法

既に大略は前にのべたる通りにて其効を見るもあり又此術を施すは甲乙者が手早く術をなすべし第一に死相中に眼中の色を見るべし他殺の首締をなした時は眼の環が上に有り又自身に首を絞る者は眼の環が下の方にあり又後門を開き見て假死者が閭口より大便をなし居る時は十中の七八迄は蘇生せず成共早き時は其効あり十分位迄の分は必ず生ると知るべし水死も同事なり水死者は第一に呑たる水を吐して術を施すべし假死者の時間は前と同事此の施方は柔術解剖圖解書に著す者なり。

誘活法の圖解

此の誘の活法と言ふは諸事に用る活にて最初に許す處の活にて圖の如にして假死者を仰向に寝かして其身にふれぬ樣に又がり

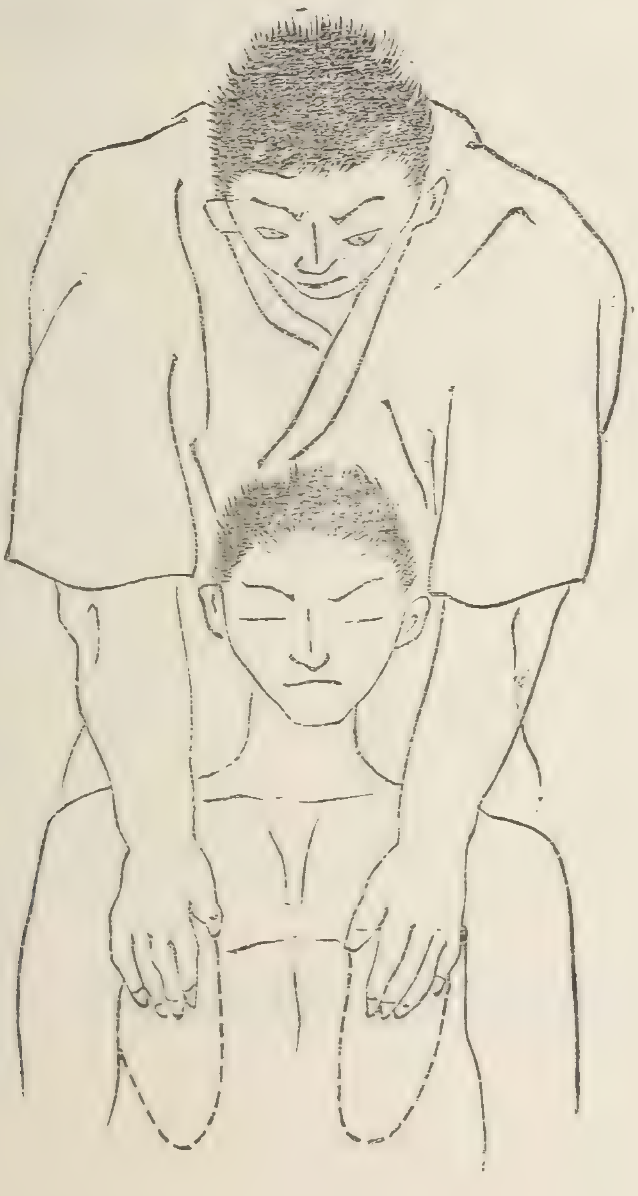
誘活第一圖

誘活法を施す處の實地圖なり指先を第一骨より下六七骨の挿畫通りにして點線の處を打處なり

胸部をなで四肢を揃て靜に抱起して第一の高骨に中指を押當第六七部の骨の左側を挿畫の如くに掌にて强く當るなり其時に中指先を放べし此時術者は總身に氣を滿て我が生氣を假死者に移心持にて充分に下腹に氣を込て(エイ)と掛聲と共に施術をなすべし其効能實に神の如し此の形は極舊式なるも未だ此形斗り用ふる流義もあり。

誘活法第二圖

兩掌を以て兩胸の乳下の處の字なりに能く摩りて後引上る處なり



故に著者は此に第一誘の活法として著す處なり。

誘活法第三圖

誘の活法を用ゆる處にして(エイ)と聲を掛る處なり

誘叉の活法圖解

此の活法は假死者を仰向に寢かせ兩足を揃へて靜に半身に起し術者は背部に廻りて右膝頭を背骨中部に押し當て左足爪先をば左斜に踏み出して圖の如く構へ假死者の活處の二三寸下の處に我が右膝頭を當て兩掌は第三圖の如く能く胸水月の處を摩擦して死者を少しく術向かせ(エイ)と發聲と共に右膝頭は活處迄押し上て強く當て其切に右爪先に力を入て術を施すべし兩手を兩脇の下より引上少しく仰向に爲す心持になすべし。

此の活法は何にも一番多く用ゆるものなり講道館にては初段に成らば此の活を許すなりと又町道場に於ては五級になる時は許されるものなる故折紙の價値は充分にあるものと知るべし。充分に練習して後術を施すべし銘刀も切手が未熟にては木劍も同樣なりと知るべし。術を施すに當り假死者の肛門を開き見る

べし締り縮まり居る者は必ず此活法にて蘇生するものなり。又口に手或は小鏡を當て息が少しにてもある時は早速に術を施し一回にて利かざる時は何回も施すべし。絞首等は手早く死者を下して仰向に寢かし其全體を摩り繩紐の跡附きたる處へは水にて能く摩り八穴を見て術を施すべし大便を洩らし居る時は術の効無きものと知るべし事二重に書きあるも大事の方法故くどく記す處なりと知るべし。

襟活法圖解

此の襟活法と言ふは術を施す迄は前と同にて第一に死相を見る事八穴を調て全身を能く摩りて其上にて靜に抱起して左手にて假死者を圖の如に抱かゝへて我が右膝頭を突き爪先を立て左足は死者の横後に立膝をして挿畫の如くに右手先をなし(中指に人指を重て)小指と紅指は折て親指と外二指に充分に力を入圖にし

めす通りに構て術者は總身に氣を滿て口を結びて明星の處に右の手を當我が生氣を假死者に移やうに(エイ)と掛聲を發するとたんに左手を前に死者を屈むやうになすと同時に下より臍の處迄突込むなり充分に臂を張り下より死者を覗き見上る心得にて術を施すべし。

又誘活法を施して尙又襟活を入る事あり此の誘の活と襟活は二種の活連絡てあると云も可なり淺山一傳流の活は一種にて只一つ有のみ卷中に著すなり。

此活法を級段によりて敎師は次第〳〵に許す先生もあり眞揚流には十三活法有り中には十六活法ありと言ふ先生もあるが此活法と云は諸先生の極意の許の物の內にて卷物を給與て段級を定める事もあり。

尙此の明細は敎師用及柔術解剖圖解書に著すなり餘言

襟活法圖

襟活法の施方をしめす處右手を以
て明星の兩脇に指の當る處なり

陰嚢活法圖解

陰嚢活法とは俗に睾丸活の事なれども前の襟活を襟活と云ふ方が紛らはしからざれども昔よりの云ひ慣はしなれば矢張り襟活といふべし、是は高き所より落ち睾丸を腹内に入るゝ事あり又稽古中過つて蹴込まれたる時に施す活法なり是を施すには假死者を抱き起して第一圖の如く構へ術者は死者の背部に廻り下腹に力を入れ眞之位第二の構を斜にし死者の兩脇の下へ兩手を差し入れ抱き上げては落す事六七回行ひたる後死者の片手を持ち上げ圖の如く右足の●點の處にて靜に後稻妻の處を蹴るなり。

然して又元の如く抱き上げては落したる後襟活を施す時は睾丸が元に出るなり其の機に乘じ活を施すべし意外に此術は心安けれど六ケ數點もある故實地に出會ふ時は能く覺へ置くべし、又往々睾丸を片々潰す事あり最も大事の術なれば柔術家は常に歩行

するも陰嚢を圍みて氣を附けべし第一圖より第二圖の如く數回施術したる後又死者を靜に仰向に寢せて我は其兩股の處に跨り兩手先の指を組み合せ兩肘先を死者の膻中の兩脇に押當て右膝を突きて爪立ち左足は立膝を爲し下腹に氣を罩めて(エイ)と聲を發すると同時に死者の首を前へ持ち上げ兩肘を當るなり此活を施すも又襟活を施すも差支なし數回も施して其の効なき時は死相を見るべし最も死相は術を施す前に見るべきものなるが手遲れとならざる樣術の方を先に施すなり、此の相見の概略を記すれば第一卒倒者の眼瞼を開き見るべし眼中の瞳孔俗にひとみと云ふ處が白色に變ずる時は蘇生の効なしと知るべし又唇を開き見て元の如く成らず開きたる儘なれば蘇生の見込なしと知るべし。

陰嚢活法第一圖

抱かゝえて上げかけの處の圖此の樣にて六七度を上たり落したりする構へなり

陰嚢活法第二圖

後稻妻を蹴込居るの圖なり●點に氣付るべし

陰嚢活法第三圖

臆中の兩脇に我が兩肘を押當て首を
前に引起す處なり手先組合して居る

裏活法圖解

此の活法を施すには死者を腹這に寢かせて術者は死者の兩膝の邊に跨り左膝を突き爪立ちて右膝は立て死者に障ぬ樣に爲し我が全體に力を罩め兩掌を揃へて背中を能く上下及肺入惣活の腹部を摩擦し而して兩乳の後背部の第六髓の左右と思ふ處を下より突上るなり電光の處の肺肝を開く爲め呼吸の運動を爲す故に蘇生するなり詳細は教師用に著す。

裏活法圖

此の圖解は死者を俯向に臥かして背
部を摩擦して是を俗に背活と云ふ

淺山一傳流の活法

抑も此活法は淺山一傳流教師金子勝平先生の教傳にして手數は唯一手にて蘇生する活法なり著者未だ實地に施したる事なけれど是は死者を左手にて抱込み右手五指を揃へて水月下の處へ當て右足の小指の方を明星の下の處へ押し當て左手にては活所を打ち此の三つを一時に氣合を入れて施すなり(ニイ)と發聲と共に前の方法の如くの術なり假に此方法は一理あり柔術解剖書に實地明記すべし。

淺山一傳流活法

仕方の圖畫は本文に參照すべし

末書に加へて
此の書を著について義爲數年間にして今度教科書を專習科に加りたるを幸に新故の大先生の名言實地の研究として尙助技を四五名に依賴し畫工を奥村義三氏を主任にし是又二三の助技を加へて引書も用ひ古來の秘傳を集て更に青年の輩にも現今の諸先生の參考生徒の讀本として數年の巧にてよう〳〵册子に綴る事の出來上りて成りたる者なれば讀者諸君は今此連名の先生に附て教授を受たるも同じ事なり其人の概略を記せば左の如し
故久富鐵太郞、金谷元良、横山作次郞、高木芳雄、金子勝平、今泉八郞
市川大八、井上敬太郞、大竹森吉、吉田千春、水谷、今人皆傳、神保信重、
五世磯又衞門、八谷建三、中村半助、指田吉晴、奥田松五郞、尙此の本
に對し技者をして田中宗吉、吉田、津田、山崎
の各免許の先生を以て著したれば此册子は古今の名人の手を以て教を受たるも同樣なる珍書なれば讀者は其廣德なる事情を察

して常に勉強有らん事をば著者の心切なる所をしり玉へ是に本末にのこす處なり是に引續き二三年の内に追々著す者なり

大正元年十月中旬

免許井口義爲記

亂捕活法　柔術敎科書終

大正元年十月十日印刷
大正元年十月十四日發行

柔術教科書奥附
正價金壹圓貳拾錢

著作所有權

著作兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十三番地　井口松之助
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　荻原勝次郎
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十三番地　魁眞書樓

大賣捌所　東京　博文館　東京　東京堂　大阪　寶文館　全國至所有名書肆

全國大賣捌取次販賣書籍店

東京同業大取次處

- 勉强堂
- 中西屋
- 二松堂
- 三省堂
- 上田屋書店
- 大倉書店
- 嵩山堂
- 至誠堂
- 目黑書店
- 松邑三松堂
- 北隆館
- 金櫻堂
- 大洋堂
- 鍾美堂
- 新橋堂
- 東海堂
- 良明堂
- 有斐閣
- 淺見文昌堂
- 岡村庄兵衞
- 大川屋錠吉
- 服部求光閣
- 東京市全體雜誌店

大阪市

- 名倉昭文館
- 青木嵩山堂
- 杉本要
- 三宅庄藏
- 矢部福音社
- 森精美堂
- 奥田金正堂
- 岡田菊次郎
- 藤谷崇文館
- 鈴木修文館
- 石川留吉

京都市

- 東枝律書房
- 川合文港堂
- 松田庄助
- 山中巖松堂
- 寶文館書店

名古屋市

- 川瀨書店
- 百架堂書店
- 星野文星堂
- 梶田勘助
- 淺見文昌堂

横濱

- 有隣堂
- 天野弘集堂

- 神戸　日東館
- 同　川瀨書店
- 同　松浦庄助
- 函館　小島六盛堂
- 同　魁文舍
- 留者市　一二堂書店
- 同　菊竹金文堂
- 熊本　長崎次郎
- 鹿兒島　吉田幸兵衞
- 同　久永金光堂
- 大分　甲斐治平
- 長岡　目黑書店
- 同　覺記上田屋
- 千葉　多田屋書店
- 仙臺　藤原書店
- 長野　西澤書店
- 松本　高見書店
- 諏訪　水琴堂
- 同　宮阪日新堂
- 金澤　宇都宮書店
- 高岡　學海堂
- 岡山　山陽書籍株式會社
- 朝鮮　日韓書房

全國至ル處ノ書籍雜誌店ニモ賣捌候也

魁眞書樓最新版書目錄

諸大家大先生題字序文
免許 柳松齋 井口義爲著述

殺活自在接骨秘傳 柔術極意解剖圖鑑

近刊

本書は最も著者が多年間諸先生と交際し硏究會等見聞なしたる事珍説奥義柔術家秘法形亂捕廳所接骨方諸死活法に解剖講義に挿畫を以て説明し秘術法全體に圖畫加へたれば諸先生參考生徒の心得に至る迄も著又藥種活法古來の傳言名人の發達格言を集め義爲一生一代著書と云は此冊子に殘し滿天下の武士道式を廣く敎へて性來に我が志氣を講讀諸君に思を發す爲一本に綴りたれば發行の期日を待て求め給へ

柳松齋 井口義爲先生著

獨習圖解 劍舞大鑑 附居合法圖解

全一冊

四六版頗美本
正價金卅五錢
郵稅 金四錢

本書は井口義爲先生永年苦心の結果居合の型及劍術の型都而眞の武術的の原理より割出して劍舞の手を附て其樣に圖解を加へて最も平易に解しよく點線蔭圖を以て此書を一見しても獨習自在に覺られること鏡の如くなり故に此書の奥義を極めば忽ち勇壯活潑心なふ精らす神を起して倭鬼を悟る實に天下無比の好劍舞獨習の良書也 發行所 東京 博文館 東京 東京堂

法學士 大原彌一郎先生
辯護士 齋藤孝治先生 合著

新舊對照 ポケット刑法

參照大審院判例要旨

本書は四、五、六號の活版を以て上等紙に印刷したれば極めて鮮明なり本書は四方の主人は勿論小僧に至に迄も常に心得居るべき事は云迄もなく故に輕便を主とし大册を懷中本として新舊の刑法を對照とて明かに解し得べき珍書なり

總クロース金文字頗美本
竪三寸 横二寸 三百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金四錢

小川直子序文 中島春郊先生著

家庭料理 儉約美食

此書は表題の如く來客其他日用に便する僅なる費用を以て即席に美味なる料理を製法し得る方法にして春郊先生の好に令孃靜子が實驗の上にて最も平易に出來る殊に親切に書き綴りて各奥方等の臺所調法とも云べき者なれば男女にかゝわらず缺べならざるの最も良書なり

菊判頗美製本
正價金卅五錢
郵稅金六錢

直眞影流十五世　齋藤明信先生著

直眞影流 劔術極意教授圖解

四六版總クロース美製
正價金壹圓
郵稅金八錢

本書は齋藤明信先生が直眞影流劔道の形に挿畫を加へて眞の劔道之教を各派の先生及生徒に至る迄手を以て敎へる如くに圖畫に說明を附て何人にも圖を觀たるばかりにても劔術の形を獨習し得られる者なり其目錄法定之部○八相發破形挿圖の數式十三圖○一刀兩斷形十二圖○右轉左轉形十七圖○長矩一味形二十圖

◉韜之形部龍尾左右形圖左十四圖右十圖○面影形左右形十五圖○鐵破進退形左右十六圖○松風形左右十六圖早船形左右十一圖○曲尺形十三圖○圓連、刀連、體速形十三圖

◉袋韜之部小韜之部○風勢形十餘圖○水勢形五圖○口切先返し形五圖○鍔取り形六圖○突非押非形七圖○圓快形六圖○双挽眞劍之部挿畫第一本目より第四本目迄に四十六圖以上也

右目錄を一讀しても劍道の心得ある者は必も一本を求めて著者の心を込て發行者の熱心なる事を知れ

全國一手大賣捌所　日本橋區本町三丁目　博文館

發行元　魁眞書樓

高等女學校裁縫教授　高橋ルイ子著

廿世紀裁縫自在

本書は表題の如く初心者にても教育の參考にも相成新案裁縫手引草とも云べき者にて手を以て生徒に敎へる如く圖解をほどこしたれば先生が永年の經驗のものを一册にして女學生及び教員等の爲になる珍書と云べき者也

菊判倭綴全一册
正價金三十八錢
郵税金六錢

東京弓術講習會編纂（第四版）

諸流 弓術極意教授圖解

本書は各派弓術家の奥儀極意を集めて其上に古書及歷史上弓術起より弓術の解説に圖解を以て先生等の心得へ亦中學校以上の日本歷史の參考にもなり弦方の圖解古式の禮法等迄を明細に圖畫をもつて記したれば一本を購求して此書の心妙なる事をしれ

菊判總クロース製全一册
定價金七十錢
郵税金六錢

東京博物研究會編纂

和洋四季 草花培養圖解

本書は、よんで字の如く草花を描いたものではあるが、全部彩色をして、草花の美を照會すると同時に往々世間に誤られたる名稱を、これによつて正しい名稱に改めて戴きたいのが此の書の眼目で、終りに栽培法、各種の特質など記述したのは、一層この圖解を美ならしむるの目的に外ならないのであります、學校園設置用、家庭園藝用として愛讀せられんことを、切に希望のあまり一言はしがきす。

四六版總クロース頗美製本
挿畫凡そ二百種 石版數十度
刷の極彩色の口繪にて廿七葉入
正價金八十五錢 郵稅金六錢

賜天覽

庭造法圖式大鑑

正二位勳一等侯爵 蜂須賀茂昭閣下題字
正四位文學博士 本居豐穎先生題歌
意匠通考案 中島春郊翁著

本書の著者中島先生は舊金澤藩前田侯爵家の御庭園を造られたる家元にて古來より同家に秘藏せる圖面を今回世に公にせるものにして近時諸國に於ける庭園及我邦有名なる庭園並に眞行草を蒐集し庭の大中小の分部に符點を施して造園家をして將に垂涎せしむるの珍書なり大高評を博したる良本

大本頗美製箱入 全一冊
竪九寸餘横一尺二寸五分
口繪寫眞前田蜂須賀家庭
全體石版彩色數度刷
正價金三圓五十錢
郵稅內國一冊金十六錢

俳諧正派會長泉々居穿井先生閲
指頭庵主人服部耕雨先生著

應用適例 てにをは俚言解

四六判美本全一冊
紙數百七十餘頁
正價金三十錢
郵稅金四錢

本書は北總の俳傑指頭庵主人服部耕雨先生が夙に明治の俳迷の振はざるを愁ひて俳諧正派のために心血を注ぎて是が編纂を企て幾多の歲月を費して初て大成す即ち冠字するに應用適例の四字を配し名けて天満に波俚言解と云ふ材料書類豐富にさてしかも能く其錯雜を來ざるのみならず經營縱橫秩序を犯さず唯一絕好の書也蓋し斯道に志ある者は素より據て來るの淵源を知らんと欲するものは正に机上一本を備へざる可かざる也

竹田畫譜	全貳册
竹田畫譜後集	全貳册
對山畫譜	全貳册
靄厓畫譜	全貳册

小本各康熙
綴り頗美本
正價各金廿五錢
郵稅一册金四錢

右四書は彩色刷にして體裁頗美製魁眞書樓自浸の珍書なり

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03171 3282

FOR USE IN
LIBRARY
ONLY

RESTRICTED SHELF